The 18th Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP)

Makuhari
February 00nd-00th, 2019

JYPO
Japan Young Psychiatrists Organization
認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会

The 18th Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP)

Timetable of program ····· 4
講師・アドバイザー・一覧 ····· 5
参加者一覧 ····· 6
はじめに ····· 7
Introduction of JYPO ····· 8
Introduction of Participants ····· 12
Small Group Work (Day1-Day3) : Making an idea of a mental health app for smart phone ····· 14
How to make a presentation
社会医療法人高見徳風会　希望ヶ丘ホスピタル　副院長　佐藤　創一郎先生 ····· 21
Oral Presentation Sessions ····· 23
Meet the Expert: How to improve your presentation
順天堂大学医学部　外国語研究室　准教授　Marcellus Nealy先生 ····· 26
Poster session and mini-lecture: How to make a poster
The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP) 代表　Norman Sartorius先生
医療法人すずらん会たろうクリニック　院長　内田　直樹先生 ····· 29
Meet the Expert: Interdisciplinary studies and collaboration
東京医科歯科大学大学院　精神行動医科学分野　教授　高橋　英彦先生 ····· 32
How to present a curriculum vitae (resume) and a motivation letter
The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP)
代表　Norman Sartorius先生 ····· 34
How to be elected
The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP)
代表　Norman Sartorius先生 ····· 37
How to prepare a meeting of a committee
The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP)
代表　Norman Sartorius先生 ····· 39
Special Session: Post CADP "GO-EN" Project ····· 41
Evaluations of the 18th CADP and Farewell Remarks
The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP)
代表　Norman Sartorius先生 ····· 43
Evaluation of the 18th CADP and Future Prospects for the 19th ····· 45
Remarks from the overseas participants
Hong Kong Psychiatry and Integrated Medical Centre　Chung Hin Willy Wong先生 ····· 47
NorthEastern Institute of Child and Adolescent Mental Health　Nitchawan Jongrakthanakij先生 ····· 47
Department of Psychiatry, Siriraj Hospital, Mahidol University　Maytinee Srifuengfung 先生 ····· 48
Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University　Pichaya Pojanapotha先生 ····· 48
Saint-Luc University Hospita and La Petite Maison ACIS　Camille Noël先生 ····· 49
Psychiatric Hospital in Straszęcin　Andrzej Minor先生 ····· 50
18th CADP Best Presenter Awards ····· 51
19th CADPのご案内 ····· 52
JYPO参加募集案内 ····· 53
正会員入会申込書 ····· 54
協賛・19th CADP運営委員 ····· 55

Timetable of program

Day 1 Facilitator: Dr. Morio Aki

Time	February 14th (Thu)
12:30-13:00	Registration
13:00-13:10	1. Opening Remarks and Description of the Course Prof. Norman Sartorius
13:10-13:20	2. Introduction of JYPO Dr. Toru Horinouchi
13:20-13:30	3. Introduction of CADP, General Information Dr. Hiroyuki Fukushima
13:30-15:00	4. Introduction of Participants Prof. Norman Sartorius
15:00-15:10	Break
15:10-15:35	5. Lecture: How to Make a Presentation Dr. Soichiro Sato, Prof. Norman Sartorius
15:35-15:45	Break
15:45-17:25	6. Oral Presentation A Chaired by Dr. Kana Morimoto, Dr. Anri Watanabe Speaker: Dr. Masato Masuda, Dr. Toshihiro Shimizu, Dr. Pichaya Pojanapotha, Dr. Kyosuke Sawada
17:25-17:35	Break
17:35-18:35	7. Meet the Expert Prof. Marcellus Nealy
18:35-18:45	Break
18:45-19:45	8. Small Group Work Day1 Chaired by SGW Committee
19:45-20:00	Photography
20:00-22:00	Reception Dinner

Day 2 Facilitator: Dr. Hiroyuki Fukushima

Time	February 15th (Fri)
8:30-10:00	9. Oral Presentation B Chaired by Dr. Yuto Satake, Dr. Chung Hin Willy Wong Speaker: Dr Naoki Katayama, Dr. Nitchawan Jongrakthanakij, Dr. Andrzej Minor, Dr. Midori Hara
10:00-10:10	Break
10:10-11:40	10. Oral Presentation C Chaired by Dr. Kenta Deriha, Dr. Shinsuke Nakano Speaker: Dr. Shou Fukushima, Dr. Camille Noël, Dr. Shun Kudo, Dr. Riki Kitaoka
11:40-13:00	Lunch / Poster Evaluation
13:00-14:30	11. Poster Session and Mini Lecture: How to Make a Poster Dr. Naoki Uchida, Prof. Norman Sartorius
14:30-14:40	Break
14:40-15:40	12. Meet the Expert Prof. Hidehiko Takahashi
15:40-15:50	Break
15:50-17:20	13. Oral Presentation D Chaired by Dr. Akihisa Iriki, Dr. Ryo Kawagishi Speaker: Dr. Izumi Kuramochi, Dr. Kota Funahashi, Dr. Maytinee Srifuengfung, Dr. Hideki Matsuoka
17:20-17:30	Break
17:30-19:00	14. Small Group Work Day 2 Chaired by SGW committee
19:00-19:10	Photography
19:10-20:10	Reception Dinner

Day 3 Facilitator: Dr. Takuji Izuno

Time	February 16th (Sat)
8:30-9:15	15. Special lecture: How to present a curriculum vitae (resumé) and a motivation letter Prof. Norman Sartorius
9:15-9:25	Break
9:25-10:55	16. Small Group Work Day 3 Chaired by SGW committee
10:55-11:05	Break
11:05-11:50	17. Special lecture: How to be elected Prof. Norman Sartorius
11:50-12:00	Photography
12:00-13:00	Lunch
13:00-13:45	18. Special Lecture: How to prepare a meeting of a committee Prof. Norman Sartorius
13:45-13:55	Break
13:55-15:20	19. Special Session: Post CADP “GO-EN” Project Chaired by CADP chairpersons
15:20-15:30	Break
15:30-17:00	20. Evaluation of Meeting and Farewell Remarks Prof. Norman Sartorius
17:00-18:30	21. JYPO Meeting Evaluation of the 18th CADP and Future Prospects for the 19th
19:00-21:00	**Farewell Party <Option>**

顧問・講師・アドバイザー・一覧

■顧問

Norman Sartorius
The association for the Improvement of Mental Health Programmes（AIMHP）代表

佐藤　光源
東北大学 名誉教授

■特別講師

佐藤　創一郎
社会医療法人高見徳風会　希望ヶ丘ホスピタル　副院長

内田　直樹
医療法人すずらん会　たろうクリニック　院長

Marcellus Nealy
順天堂大学医学部　外国語研究室　准教授

高橋　英彦
東京医科歯科大学大学院　精神行動医科学分野　教授

■アドバイザー

青山　久美
横浜市立大学附属病院市民総合医療センター　精神医療センター

長　徹二
三重県立こころの医療センター

堀之内　徹
北海道大学大学院医学院　神経病態学講座精神医学教室

大矢　希
京都府立医科大学　精神医学教室

久我　弘典
九州大学病院　精神科・神経科

伊井　俊貴
名古屋市立大学　精神・認知・行動医学分野

中神　由香子
京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座（精神医学）

所属等は2019年2月時点のものです。（敬称略）

参加者一覧

■国内参加者

【委員長】

福島　弘之
医療法人桜花会 醍醐病院

【副委員長】

安藝　森央
公立豊岡病院組合立 豊岡病院

伊津野　拓司
神奈川県立病院機構
神奈川県立精神医療センター

【4回目】

吉田　和史
国立病院機構 琉球病院

【3回目】

久納　一輝
三重県立こころの医療センター

濵本　妙子
三重県立こころの医療センター

渡辺　杏里
京都府立医科大学　精神医学教室

【2回目】

入來　晃久
大阪府立病院機構　大阪精神医療センター

河岸　嶺将
千葉県こどもの病院

佐竹　祐人
大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

出利葉　健太
医療法人北仁会 いしばし病院

中野　心介
医療法人社団新光会 不知火病院

福嶋　翔
医療法人厚生会 道ノ尾病院

森本　佳奈
社会福祉法人京都社会事業財団　京都桂病院

【初回】

片山　直毅
大阪大学医学部附属病院

北岡　力
国立病院機構 舞鶴医療センター

工藤　駿
慶應義塾大学医学部　精神・神経科学教室

倉持　泉
埼玉医科大学病院　神経精神科・心療内科

澤田　恭助
慶應義塾大学医学部　精神・神経科学教室

清水　俊宏
埼玉県立精神医療センター

原　碧
国立病院機構　肥前精神医療センター

舟橋　孝太
藤田医科大学医学部　精神神経科学講座

増田　雅人
福岡大学医学部　精神医学教室

松岡　秀樹
福岡大学医学部　精神医学教室

■海外参加者

Nitchawan Jongrakthanakij
NorthEastern Institute of Child and Adolescent Mental Health, Thailand

Pichaya Pojanapotha
Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University, Thailand

Chung Hin Willy Wong
Hong Kong Psychiatry And Integrated Medical Centre, Hong Kong

Maytinee Srifuengfung
Department of Psychiatry, Siriraj Hospital, Mahidol University, Thailand

Camille Noël
Saint-Luc University Hospita and La Petite Maison ACIS, Belgium

Andrzej Minor
Psychiatric Hospital in Straszęcin, Poland

所属等は2019年2月時点のものです。（敬称略）

はじめに

18th CADP 運営委員長
医療法人桜花会 醍醐病院　福島　弘之

このたびは本報告書を手にとっていただき、ありがとうございます。

The Course for Academic Development of Psychiatrists（CADP）は、若手精神科医の教育プログラムとして作成された、2泊3日の合宿形式で行う研修会です。精神科医療に関わる題材を通して、国際学会での発表方法、座長の進行方法、履歴書の書き方や会議の進行方法など、多岐にわたる学術的な技術を習得することを目的としています。会期中の進行・議論・質疑応答を全て英語で行うことが特長です。

第1回CADPは、World Health Organization（WHO）精神保健部長であったNorman Sartorius 先生と、日本精神神経学会理事長であった佐藤光源先生のご指導のもと、世界精神医学会と日本精神神経学会の合同事業として2002年に開催されました。この開催を契機に同年日本若手精神科医の会（Japan Young Psychiatrists Organization: JYPO）が発足し、CADPは今日まで毎年開催されています。発足当初のJYPOは任意団体でしたが、健全な運営活動を評価いただき、2008年特定非営利活動法人（NPO法人）として認可されました。さらに2016年には認定NPO法人へ格上げされ、今日に至ります。

CADPの参加によって、参加者間に強い結束が生まれ、会終了後もメーリングリスト、Social Network Service（SNS）、学会参加等で交流が続き、その交流は他のJYPO活動にも活かされています。また、第7回CADPからは国内のみならず海外からも募集を開始し、毎年世界各国から多くの若手精神科医が参加しており、これまでの延べ参加者数は600名以上にのぼります。

今回の第18回CADPには、全国各地からの国内参加者24名、タイ・香港・ポーランド・ベルギーからの海外参加者6名、計30名の若手精神科医が参加しました。特別講師として、初回から毎年のCADP全日程に参加いただいている Norman Sartorius 先生を今年も迎えることができました。Sartorius 先生には、例年プログラムの構成段階から大いにご助言・ご指導いただいております。また、JYPOのOBであり東京医科歯科大学教授の高橋英彦先生に、ご自身のキャリア・活動にまつわるご講演を、順天堂大学准教授のMarcellus Nealy先生に、presentationにおけるロジックの重要性についての講演をいただきました。さらに、JYPOのOBである希望ヶ丘ホスピタルの佐藤創一郎先生には、オーラルプレゼンテーションに関する講義を、たろうクリニックの内田直樹先生にはポスタープレゼンテーションに関する講義を担当いただきました。その他、今回は「CADPでできた関係性をさらに今後につなげていく」ことをコンセプトとしたセッション "GO-EN" project を開催し、CADPでできた関係性を用いて、臨床・研究その他どのような諸活動を実施していくか、実施したいかについて話し合いを行いました。CADP参加経験者である諸先生がたにもアドバイザーとして参加いただきました。ご講演いただいた先生方、お集まりくださった先生方には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

今回のCADP開催に際して、多くの先生がた、財団、企業より多岐にわたるご支援・ご賛助をいただきました。さらに各参加者の所属元である諸大学・病院・研究機関の先生方におかれましては、CADP参加に際して快く送り出してくださり、誠にありがとうございました。

最後になりましたが、本報告書をお手にとっていただきました皆様に深く御礼申し上げるとともに、お近くにCADP・JYPOに興味をお持ちの方がおられましたら、是非お声掛けいただけると幸いです。JYPOは今後も日本および世界の精神科医療に微力ながら貢献できるよう取り組んでまいりますので、引き続きご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

Introduction of JYPO

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会　理事長
北海道大学大学院医学院神経病態学講座 精神医学教室　堀之内　徹

当報告書の場を借りて、JYPOおよびCADPについて紹介する。

■JYPOの沿革

1. 2002年設立、2008年NPO法人化

JYPOの設立契機は、日本での第1回CADP開催である。Norman Sartorius先生によって開発されたプログラムであるCADPは、2002年の第12回世界精神医学会総会（12th World Congress of Psychiatry、横浜）に先立って、世界精神医学会（World Psychiatric Association: WPA）と日本精神神経学会（The Japanese Society of Psychiatry and Neurology: JSPN）の合同事業として開催された。JYPO設立の目的は、国際的に活躍できる若手精神科医の研鑽・発展と、大学や研究機関・医療施設などの枠組みを超えた相互交流であり、その精神は今日まで引き継がれている。第1回CADPで知り合った30余名の創成期メンバーは、その後、国内外で実施される各種研修会、多施設研究、交流プログラムの実施、各種学会におけるシンポジウム、CADPを始めとする研修プログラムの開催を通じて、JYPOのネットワークを広げていった。

従来の活動を更に発展させ、その成果を社会に還元するため、2008年5月には、NPO法人格を取得した。設立当初から支援いただいている佐藤光源先生（東北大学名誉教授）、Norman Sartorius先生（Association for the Improvement of Mental Health Programs: AIMHP代表）を顧問に迎え、「NPO法人　日本若手精神科医の会」として新たなスタートを切ることとなった。

2. 2016年認定NPO法人へ格上げ

NPO法人認証後も、これまで同様に他団体や学会等との連携を強化しながら、社会貢献や公正性を意識する必要がこれまで以上に生じるなかで、活動を継続してきた。こうした活動が評価され、2016年1月に認定NPO法人として認証された。認定NPO法人とは、NPO法人の中で運営組織および事業活動が適正で、特定非営利活動の健全な発展の基盤を有し公益の増進に資すると見込まれる法人である。この認証を受け、精神科医療の発展などを通じて、より一層公益の増進に寄与できるよう活動を進めていく方針を再確認し、今日に至っている。

2002年の設立以降、JYPOのネットワークは徐々に広がり、現在の若手精神科医会員数は約110名、OB/OGは120名以上となっているほか、多くの賛助会員に支援いただいている。メンバーは、ホームページ、メーリングリスト、学会活動等を通じて活発に情報交換を行っており、全国各地に点在する会員のネットワークを活かした活動を続けていく予定である。

■メンバーシップ

1. 卒後12年以内の若手精神科医会員

JYPOはNPO法人であり、会の趣旨に反しない限り誰もが参加可能である。正会員のうち、次の1）～3）を満たす会員は「若手精神科医会員」と呼ばれる。

1）入会時、卒後12年以内の精神科臨床・研究に携わる医師
2）入会時、精神科臨床経験が10年以内の医師
3）日本精神神経学会会員

2. 6年での“卒業”制度

JYPOは「若手」精神科医の会であり続けるために独自の制度を設けており、若手精神科医会員としての在籍を6年以内とした制度を採用している。この卒業制度によって、会員は常に入れ替わり、経験を積んだ会員が若手の活動を支援しながらさまざまな活動に携わり、以降の活動においてはその若手の会員たちが中心となって運営を行う体制が築かれている。このことにより、若手会員がさまざまな活動に携わることができ、多くの経験を皆で共有することが可能となっている。

■主な活動内容

1. 研修会、ワークショップ

● CADP

JYPOを創設する契機になった研修会であり、今なおJYPOの中で最も重点が置かれているものである。例年2月に開催される当研修会では、精神医学の知識を得ることよりも、学術的な技術・考え方の研鑽に重点が置かれ、Sartorius先生をはじめ、精神医学のさまざまな領域で活躍されているエキスパートからご指導をいただいている。参加者全員が同じホテルで2泊3日の合宿形式で行っており、当初から英語でのディスカッションを基本とし、第7回CADPからは海外参加者の募集も行っている。

初回参加者は英語でのオーラルプレゼンテーション、2回目の参加者はポスタープレゼンテーションが課題となっており、これら以外にもエキスパートによる特別講義や、小グループに分かれてのグループディスカッションといったプログラムで構成されている。

また、会の大きな特徴の1つとして、参加者募集から当日の進行までの、準備・企画・運営に際しても、毎回の運営代表者を中心とした運営委員のメンバーによって行われていることが挙げられる。その際にはSartorius先生の助言を得ながら、プログラムを自分たちで作り上げることも特徴の1つである。CADP最終日には大きな疲労感とともに得も言われぬ充実感を味わうことができ、複数回参加する会員も数多い。詳細は当報告書を参照いただきたい。

● 臨床疫学ワークショップ

疫学的知識やその研鑽に対するニーズは精神科医療においても非常に高い。JYPOでは、日常臨床においてエビデンスを生かす方法を身に付けることを目的として、統計学、論文の批判的吟味などについて研修を年1回行っている。これま

での参加者からも好評であり、今後も継続して開催予定である（例年秋頃に開催）。

2. 研究活動

これまでに述べてきた国内外のネットワークを活かし、多施設共同研究に取り組み、その成果を国内外の専門誌に発表してきた。国際誌への掲載例として下記のようなものが挙げられる。

- 精神科受診経路に関する多施設研究（Pathway研究）
  Fujisawa D et al. Int J Ment Health Syst. 2008
- 精神科Subspecialtyに関する意識調査
  Tateno M et al. Child Adolesc Psychiatry Ment Health. 2009
- 精神科非自発的治療に関する意識調査
  Tateno M et al. Int J Ment Health Syst. 2009
- 精神科医のライフワークバランスとバーンアウトに関する研究
  Umene-Nakano W et al. PLoS One. 2013
- 対人恐怖症: 文化結合的診断に関する若手精神科医の視点。
  Nakagami Y et al. Psychiatry Clin Neurosci. 2016.
- 最適な初期研修に関する調査
  Horinouchi T et al. Acad Psychiatry. 2017
- 自殺予防に関するアプローチ: 日本および全国の若手精神科医から
  Saito S et al. Psychiatry Clin Neurosci. 2018

その他、精神科卒後研究（初期研修に関する意識調査）、精神科卒後研究（専門医制度導入に伴う精神科医の意識調査）、精神科医療の地域性に関する調査などを行った実績がある。2013年には日本プライマリ・ケア連合学会若手医師部会と共同して、精神科医とプライマリ・ケア医の精神疾患に関するスティグマに関する調査も行った。現在も複数の研究計画を進行中である。

3. 翻訳活動

当初の活動は、WPA学会誌であるWorld Psychiatryの翻訳を2008年より会員有志らで手分けして実施し始めたことである。2013年より翻訳委員会を組織してよりシステマティックかつ継続的に翻訳できる体制を確立し、現在はWorld Psychiatryで出版された全論文の抄録および一部論文の全文翻訳を継続している。また、2013年には、Sartorius先生執筆の書籍である「Fighting for Mental Health」をJYPO会員らで翻訳、「アンチスティグマの精神医学」と題して出版した。さらにWPA関連ガイドライン、the International Classification of Diseases 11th Revision（ICD-11）への改定に向けたフィールド調査の翻訳などを通じて、海外で得られた最新の知見を日本に広めるべく精力的に活動している。

4. Mental Health First Aid（MHFA）

Mental Health First Aid（MHFA）「こころの応急処置マニュアル」は、専門家による支援の前に提供する精神的な支援に関する、オーストラリアで作成されたマニュアルである。日本では、JYPOのOB/OGメンバーを中心にMental Health First Aid Japan（MHFA-J）を組織化し、マニュアルや教育スライドの翻訳を行っている。そして、研究をベースとすることに重きを置きつつ、日本各地で複数のロールプレイを組み込んだ体験型の研修を多く開催している。メンタルヘルスの問題を有する人に対して、専門家の支援が提供される前に症状を素早く察知し、精神症状の悪化や自殺を予防することが重要であり、JYPOではこの活動に協力し続けている。

5. 国内外の交流

上述の活動以外にも国内外のさまざまな学会において、多施設研究の成果の発表・シンポジウムの開催などを通じて会員相互の交流を深めてきた。JSPN総会は、我々が最も力を入れている学会であり、JYPO会員が中心となって企画したシンポジウムを今までも多数開催してきたほか、JSPN総会で提供されている海外若手精神科医を対象としたfellowship award programに関連して、海外参加者の関わるシンポジウムの運営・懇親会の開催に尽力している。彼らの日本での滞在をサポートする役割を担い、海外参加者との交流を密にしており、これを契機にCADPへ参加する海外参加者も数多い。このような交流はアジアをはじめとする諸外国の精神科医療および文化に触れる貴重な機会であり、日本国内の精神科医療を見直す良い契機なっている。JYPOのこうした国内外での活動が認められた結果、JSPNが優れた精神医療活動の顕彰および精神医療の発展に寄与した団体に与える賞である精神医療奨励賞を2015年受賞した。

また、学生・研修医に精神科の魅力を伝え精神医療への関心を高めてもらうため開催されているJSPNサマースクールでは、2015年より会員有志が企画を立て、体験学習を取り入れたワークショップを担当している。参加者からの反応は比較的良好で、この活動を通して学生や研修医からJYPOへの参加を希望する声が数多くあがり、会費無料の「学生会員・研修医会員」をJYPOで設定するに至った。

■結語

このように、JYPOはキャリアの若い間から多くの取り組みに寄与することが可能で、自らが中心となって企画運営する機会が数多くある。これからも、精神医療の更なる発展に寄与すべく、多くの方々に仲間として加わっていただきたいと考えている。

Introduction of Participants

［報告者］
国立病院機構 舞鶴医療センター　北岡　力
京都府立医科大学 精神医学教室　渡辺　杏里

■はじめに

CADPが始まるにあたって最初のプログラムとして、他己紹介が行われた。他己紹介が一通り終了した段階で、注意すべき点をNorman Sartorius先生にご講演いただいた。下記にその概要を示す。

■プログラムの概要

合計37名の参加者全員が、自分の右隣に座っている人を他己紹介するというものであった。まず、前半5分で左隣の人に自己紹介を行い、後半5分で右隣の人から自己紹介を受けた。その後、各参加者は自身の右隣りの人を参加者全員に対して紹介を行った。紹介の仕方は自由で、発表者の裁量に任された。全員の他己紹介が終了した段階で、Sartorius先生が「どの他己紹介が印象に残ったか」「どのような他己紹介が望ましいか」「改善が必要な他己紹介はあったか」「好ましくない他己紹介はどのようなものか」などの質問を参加者に投げかけ、他己紹介のポイントを指導してくださった。以下に、そのポイントを記述する。

■他己紹介のポイント

- メモは見ないで発表することが望ましい（メモを見なくても発表可能な内容のみ伝える）
- 下を向かずに参加者の方を向いて話すべきである
- 目上の人を紹介するときは、相手を立たせたままで紹介すべきではない（自身が立つのは、視線を集めることができるので問題ない）
- その人の情報を羅列して話すのではなくストーリーとして話す方がよい
- プライベートな話題を紹介するときはあらかじめ本人に了承を得てから話す必要がある
- 参加者の共通の知識を想像して、必要があれば補足を行う（特に特定の集団のみにわかる地名やキャラクターの話題）

●紹介したい人と自分に共通点があった場合それを盛り込めば、自分の紹介を加えることができる

■報告者の感想

これからはじまる3日間の英語合宿の序章において、見ず知らずの隣の人とコミュニケーションを行い、さらにその人についてショートプレゼンテーションを行った。一般的には他己紹介はアイスブレイクの役割を持つが、これから続くプログラムへの緊張もあり、緊張感が感じられた。初回参加者にとってはこれから始まる様々なプログラムの詳細を知らないため、講師や運営者たちの言葉を聞き漏らすまいと集中していたと思われる。5分間のやりとりで得られる情報が多く、それらの中で印象付けられる内容を選択し、よりその人らしさの表れる内容を紹介するのは難しさを感じた。ユーモアを交えた紹介もあり、徐々に場の雰囲気が和んでいった。

他者の紹介をするにあたってのマナーを知ることは今後国際社会と関わる我々にとって、コミュニケーション

のスタートとして大事なものだと感じた。特に相手の文化について配慮する視点は、日本国内だけで生活しているときにはあまり意識したことがなく、何気なく共通項目として取り扱っていた内容も、国際社会に置いては気をつけなければならない点であることを知らされた。この後のプログラムにおいて、隣の人との関わりは多く、この他己紹介が重要な役割を果たしたことは間違いない。

Small group work（Day 1）: Making an idea of a mental health app for smart phone

Small group work organizers:

国立病院機構 琉球病院　吉田　和史
医療法人北仁会 いしばし病院　出利葉　健太
大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター　佐竹　祐人
三重県立こころの医療センター　濵本　妙子

［報告者］
国立病院機構 肥前精神医療センター　原　碧
医療法人北仁会 いしばし病院　出利葉　健太

■プログラムの概要

Small group work（SGW）は参加者が複数人のグループに分けられ、それぞれのグループで課題を行うプログラムである。今回の課題はスマートフォン向けのメンタルヘルスアプリの考想を作成することであった。最終日にアプリの考想について発表し、ディスカッションするというゴールに向けて、初日はSGWの概要説明や原案の作成、二日目は原案の発表と最終日のプレゼンテーションの作成を行った。

■グループ分け

参加者は以下のようにグループに分けられた（敬称略）。

グループ1: 舟橋孝太、久納一輝、工藤駿、Camille Noël
グループ2: 片山直毅、澤田恭助、中野心介、Nitchawan Jongrakthan
グループ3: 北岡力、渡辺杏里、Ching Hin Willy Wong、松岡秀樹
グループ4: 増田将人、河岸嶺将、Maytinee Srifuengfung、福嶋翔
グループ5: Andrzej Minor、入來晃久、倉持泉、原碧
グループ6: 清水俊宏、Pichaya Pojanapotha、森本佳奈

各グループにはいずれも海外参加者が含まれており、CADPへの参加回数や精神科医としての経験年数なども比較的均等になるようになっていた。これにより、それぞれの立場から様々な意見が出ることが期待された。

■プログラムの進行

初日のSGWでは、まず初めにオーガナイザーより今回のテーマ“Making an idea of a mental health app for smart phone”が提示された。課題は精神科医療に役立つアプリの案を作成するというものだったが、実際にアプリを開発する際に重要となる事柄に関しても考慮することが望ましいと提示された。具体的には、

対象者、予算の見積もりと資金の集め方、アプリの評価の仕方、フォローアップの仕方などである。参加者はアプリの案を作成し、2日目に1）背景、2）概要、3）アプリである必要性の3点について2分間の発表を、3日目にはアプリの案についての5分間の発表を行いディスカッションすることが求められた。そして、アプリ作成に必要な事項が記載されたワークシートおよび2日目に行われるプレゼンテーションのテンプレートが配布された。

グループワークへの理解を深める目的で、例としてオーガナイザーから「セルフモニタリングとクライシスプランを使用した双極性障害の患者への介入アプリ」についてワークシートとプレゼンテーションが示された。

初日のグループワークでは、グループごとにワークシートの項目を埋めながら、1）背景、2）概要、3）アプリである必要性の3点に関してまとめて、2分のプレゼンテーションにすることに取り組んだ。

グループワークで行われたディスカッションの内容について、グループ5を例にとり簡単に以下説明したい。

まずアプリの案を出し合う流れになり、内服薬のリマインダー、運動量の計測ツール、の2つが提示された。運動量の計測ツールに関してはすでに多くの種類のアプリがあることがわかり、新しいアプリの考想を練るという課題の趣旨を組んで内服薬のリマインダーツールとしてのアプリを考えることとなった。 1）背景としては、コンプライアンスの悪さは疾患コントロールの不良を招き、通院が途絶える結果となり、慢性疾患の多い精神疾患に対しては深刻であることが考えられた。3）アプリである必要性としてはまずは身近にあり、普段からよく確認することの多いスマートフォンにリマインダー機能を持たせることに意義があると考えられた。また、通院が途絶えるということは医師と患者間のコミュニケーション不足が一因であるとの考えに至り、コミュニケーション不足を解消するために、電話などといったように医師と患者がコミュニケーションをとる手段をアプリに盛り込むことを検討された。

■報告者の感想

CADP初日であり、まだメンバー間のコミュニケーションが少ないなかでの開始であったため、会場の参加者全員が手探りをしながらの開始となったのではないかと推測する。メンバーの緊張が高い状態での議論となった。文化的背景や、医師としての専門分野や立場が異なるメンバーそれぞれで話をし、一つの結論を生み出すのは、困難でもあり、新たな発見の多い活動であった。

Small group work (Day 2): Making an idea of a mental health app for smartphone

[報告者]
大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター　佐竹　祐人
厚生会 道ノ尾病院　福嶋　翔

■はじめに

SGWはCADP参加者がいくつかの小グループに分けられ、3日連続のプログラムの中で、一つの題材について各グループで議論を重ねるグループワークである。本年のテーマは“Making an idea of a mental health app for smartphone”で、3日間を通じて作り出したスマートフォンアプリのアイデアを最終日に発表するものであった。Day2では途中経過の報告として、各グループのアプリアイデアにおける"Background（背景）" "Outline（概要）" "Why is it needed to be app?（アプリである必要性）"の3つの項目についてプレゼンテーションがなされた後、Day3のプレゼンテーションに向け再度各グループで議論が行われた。

■プレゼンテーション

各グループのプレゼンテーションは各2分以内で行われた。それぞれの内容について、簡単に説明したい。

●グループ1

認知症や目の不自由な高齢者が増えてきているが、錠剤などの記名が表面にされていないことが多く、介護者ですら正しく認識することは困難であるということを背景として、スマートフォンのカメラを利用した医薬品認識アプリを提案した。アプリである必要性としては、カメラ付きスマートフォンは高齢者の間でも一般的で、持ち運びがしやすいという点を挙げた。

●グループ2

抑うつ状態に陥った人が自分の精神状態について自己評価する機会が少ないということを背景として、うつ病発症リスクをスクリーニングするアプリを提案した。アプリである必要性としては、簡単かつ簡便に、すべての人がうつをスクリーニングできる手法がない点を挙げた。

●グループ3

認知症患者や軽度認知障害の人びとが増えている中、介護者の負担は増加する一方であるが、彼らに対し適切なアプローチ法や評価法を教える方法が乏しいということを背景として、そういった知識や技術を伝えるアプリを提案した。アプリである必要性としては、いつでも、どこでも使用することができる点を挙げた。

●グループ4

医学生のうつ病罹患率が比較的高く、専門医受診に繋がりにくいということを背景として、医学生によるうつのセルフモニタリングのアプリを提案した。アプリである必要性としては、医学生にとって利用しやすく、教員にとってうつ状態の生徒を拾い上げフォロー

しやすくすることができる点を挙げた。

●グループ5

治療の自己中断が多いことを背景として、内服時間を知らせるリマインダーとビデオ通話による専門医の面接を可能にするアプリを提案した。アプリである必要性としては、対象患者らがスマートフォンをほとんど常に持ち歩いているであろうという点を挙げた。

●グループ6

子どもたちがインターネット依存に陥りやすい現状を背景として、子ども達の持つスマートフォンの作動時間や使用を避けることができた日をモニタリングすることができるようなアプリを提案した。アプリである必要性としては、紙ベースで子どもたちが自分で報告することが難しいという点を挙げた。

■議論

各グループのプレゼンテーション後には、Day3に向けて再びグループごとの議論が行われた。非常に活発な議論が行われていたが、アプリのアイデアについてのプレゼンテーションの作成だけではなく、アプリを現実味のあるものにするための項目が記されたWorksheetを埋めることも要求されており、どのグループも時間内にすべての作業を終えることは難しいようであった。セッション終了後も自主的に集まって議論を行うグループは多かった。

■報告者の感想

私は今回CADP運営委員としてSGWを担当した。

事前にSGW committeeでSkype meetingを幾度も重ね、かなり案を練って本番に望み、実際にどのような議論がなされるかとても楽しみにしていた。SGW Day2のセッションは、Day3に向けての途中経過報告と、各グループが方向修正を行えるような場とすることを意図していたが、Day3の発表も踏まえて振り返ると、あまり方向修正や議論の深化という機能は果たせなかった印象があり、これはおそらくプレゼンテーション後に相互の議論の時間が持てなかったことが要因と考えられる。参加者に要求するタスクをよりシンプルにして時間を作り、相互のコミュニケーションを活性化させるようにすべきだったように思う。一方で、「スマートフォンアプリのアイデアを考える」という、日常臨床や研究業務に携わっている中で行わないようなタスクについても、参加者が興味を持って積極的に議論し、期限内にプレゼンテーションを完成させたことには非常に感銘を受けた。行うべきタスクがしっかりと定まっており、それが十分に伝わってさえいれば、参加者はそのタスク達成のために企画者が想像する以上に活発な議論を経て課題に取り組んでもらえるということを実感した。

Small group work（Day 3）: Making an idea of a mental health app for smart phone

［報告者］
社会福祉法人京都社会事業財団 京都桂病院　森本　佳奈
国立病院機構 琉球病院　吉田　和史

■はじめに

このセッションはSmall Group Work（SGW）のDay3として行われた。各グループで精神医療に有益なスマートフォンアプリの構想を練り、最終日のDay3のセッションでは5分間の発表を行った。各グループの発表後に全体で議論し、最後にNorman Sartorius先生からコメントを頂いた。

■スマートフォンアプリの発表

●グループ1

高齢者など視力が低下した患者に対し、薬剤の識別記号をカメラで読み取ることでどのタイミングで何の薬を飲めば良いかを判断し、内服間違いを防止してくれる。

●グループ2

自分の精神状態が正常か不安を抱えている人に対し、人工知能を用いてうつ状態かを判断してくれる。うつ状態にあると判断されれば、精神科病院受診を促す画面がスマートフォンに表示され、GPS機能で近くの病院を探してくれる。

●グループ3

認知症患者の家族や介護者に、認知症や軽度認知障害についての知識の提供や、接し方について教育をすることで、介護ストレスを減少させる。

●グループ4

医学生はうつ病罹患率が高いが、指導教官も多忙であり精神状態のフォローアップが難しい。医学生の精神状態をスクリーニングすることで指導教官が医学生の状態を把握しやすくなり、精神科への早期受診を促すことが可能になる。

●グループ5

精神疾患患者に対し、内服を促す通知を設定することができる。また、回数を予め設定して主治医とビデオ通話で会話をすることができ、一人の精神科医がより多くの患者の精神状態を把握できる。

●グループ6

スマートフォンを持つ子供に対し使用時間を設定する。守れた場合は親に通知され、回数に応じて親が子どもに報酬を与えることができ、親子のコミュニケーションツールになると同時に子供は自制心や自尊心を育むことができる。

■議論、助言

今回は、スマートフォンアプリを作成するという内容のSGWとなった。スマートフォンアプリ以外にも革新的な技術を導入する際に共通して考えるポイント

を学んで欲しいというSartorius先生の意図もあり、最終日に「新規性があるか」「魅力的か」「使いやすいか」「アップデートしやすいか」「コストはどのぐらいか」「倫理面はどうか」「使用後評価はできるか」「実現性はどうか」という点で各班の評価がSGWスタッフによって行われた。

各グループでスマートフォンアプリの対象や目的が異なっており、グループごとの個性が発表に表れていた。いずれの発表でも利点と欠点があり、特に財源確保や実現可能性について今後どのように対策すればよいか活発な議論が行われた。各グループでのプレゼンテーションの後に、Sartorius先生からスマートフォンアプリの構想を練る際に、必要な経費や時間経過を含めた予定表を作成するべきというコメントを頂いた。

■報告者の感想

現在健康維持や医療補助のために様々なスマートフォンアプリが開発されている。プログラミング初心者でも開発が可能になってきており、医療者自身が開発に携わることで現場から需要のあるスマートフォンアプリの開発が可能になるのではないかと思われる。今回のSGWは、各参加者がスマートフォンアプリ開発だけに留まらず、IT技術でどのように医療に革新をもたらすか考えるきっかけとなった。

How to make a presentation

社会医療法人高見徳風会 希望ヶ丘ホスピタル 副院長　**佐藤　創一郎**先生

［報告者］
福岡大学医学部 精神医学教室　松岡　秀樹
医療法人厚生会 道ノ尾病院　福嶋　翔

■はじめに

今回、JYPOの創設メンバーの一人である希望ヶ丘ホスピタルの佐藤創一郎先生よりプレゼンテーションの基本に関してご講演いただいた。下記に概要を示す。

■内容

1. Slides

- Design: スライドのフォントに関して、大きさは24ポイント以上が推奨される。字体はArial、Comic Sans、Tahomaなど太い字体が推奨され、Times Roman、Courierなど細い字体は避けたほうが無難である。色はスライドの背景の色とのコントラストをはっきりさせることが望ましく、強調のために複数の色を使用するとしても3色以内に留めておくことが望ましい。背景に肖像画は用いない。内容を強調したい場合は文字を太くするよりも下線を使用したほうが良い。
- Content: 冒頭では、座長が述べた内容は繰り返さない方が望ましく、また言語の不得手の謝罪などはしない。概要を提示したり、冗談などの聴衆を惹きつける小話は有益である。終了時は、感謝の意を表明することが推奨され、「以上です（That's all.）」とは述べない方が良い。適切な情報量は、1回のプレゼンテーションにつきメッセージは3つまで、1枚のスライドにつき要点は1つ、文章は6行までに留めておくことが望ましく、不足分は言葉で補足すれば良い。各スライドは10秒以内に総括できる情報量にすべきである。

2. Confirmation

発表直前の心得として、早めに会場に赴き、場所、広さ、気温、照明、演台、椅子などを確認することが重要である。また、あらかじめ座長とメインメッセージを共有し、時間や講演の目的などを再確認しておく。聴衆によって話す重点を変えることも必要なため一般の方、患者家族、介護者、コ・メディカル、精神科医、他科医師、専門家など、聴衆の情報を確認しておく。

3. Talk

発表中は、視線や手振りなどのボディーランゲージ、姿勢や態度に留意する。声は大きさ、速さ、抑揚などでメリハリをつけることで、より聴衆の感情に働きかけることができる。道具の使い方も意識する必要があり、マイクは可能であれば手に持ち、口とマイクの距離を一定に保つことを心がける。レーザーポインターはあくまでも点を示すために使用する道具であり、直線や円を描くような動きは避けるべきである。

4. Answering Questions

質問された際は、「興味深い質問です。」と言わない方が良く、質問者を過小評価しない。可能であれば、同じ質問者には2回以上回答しない方が望ましい。困難な質問に回答するときはABC（Acknowledgement: 感謝、Bridge: つなぎ、Communication: 対話）を意識すると良い。

5. Backup

当日機器類が故障したり、データを紛失する可能性がある。自分自身のPCやスライドを印刷したハンドアウトを持参する、あらかじめドライブスレージやクラウドストレージに保存する、などの事前準備をしておく方が望ましい。また、動作条件が異なることもあり、PowerPoint、PDFなど異なる形式で資料を準備しておくことも重要である。

6. 最後に

敬意、誠意、感謝の気持ちを持って発表することが重要である。大事な人と話す時と同じであり、プレゼンテーションを特別なものと考える必要はない。今後、様々な同僚や専門家、友人と出会う機会は多い。その中で、人を惹きつけるプレゼンテーションは発表者自身の人生やキャリアをより魅力的なものにする。

■報告者の感想

今回の講義では、プレゼンテーションに関する基本的な技術と心構えをご教授いただいた。伝え方の少しの差異で、聴衆を惹きつける力が大きく変わることを学び、大変勉強になった。また、今回の講義で学んだことは、講演時のみならず、カンファレンスやコンサルテーションなど日常業務にも通じるものであると確信している。

Oral presentation sessions

［報告者］
藤田医科大学医学部 精神神経科学講座　舟橋　孝太
三重県立こころの医療センター　久納　一輝

■セッションの概要

このセッションでは、初回参加者16名（うち海外参加者4名）が各々事前に準備したパワーポイントスライドを用いて、英語でプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションのテーマについて特に指定はなく、発表者が興味のあること、参加者に伝えたいことなどを自由に選択できた。

初日に1セッション、2日目に3セッション行われ、1セッション中に3, 4名が発表した。各セッションの座長は、2回目以降の参加者が担当した。

1名の持ち時間は7分間で、発表終了後には参加者及び、Norman Sartorius先生からコメントがあった。

参加者は各発表者のプレゼンテーションに対して、評価シートをもとに評価を行った。評価の対象は発表内容ではなく、スライドの見やすさや分かりやすさ、声の聞き取りやすさ、視線や体の動き、発表時間が守られているかなど、プレゼンテーションのスキルそのものであった。

■Sartorius先生のコメント

各発表者・座長に対するSartoroius先生からのコメントを一部紹介する。

1. 発表者に対するコメント

- 発表開始20秒で観衆の興味を引きつけないと、観衆は飽きて最後まで聞き続けることはできない。
- 座長が最初に発表者の紹介をするので改めて自己紹介をする必要はない。
- スライドの写真はなるべく大きくし、文字を詰めすぎてビジーにしない。
- 文字の赤色は警告色であるため、頻繁に用いることはしない。
- 背景が暖色である場合には背景と同系統色は用いない。
- 色はできるだけシンプルにする。
- スライドの最後にメールアドレスを載せておくと、後日コメントを頂けることもあるのでできるだけ載せるようにする。

●発表に関連したアイテムを提示することで観衆の興味を引き付けることはできるが、関連しないアイテムを使用すると混乱するので乱用は控える。
●1スライドには基本的に1メッセージまでにする。
●単語の言い回しは統一する。
●発表の最後に“That’s it.”, “That’s all.”とは言わず、“Thank you.”で終える。
●できるだけ、ゆっくりとはっきりと話すことが大切である。
●英語は専門用語もできるだけシンプルなものに言い換える。

2. 座長に対するコメント

●時間が足りなくなったら質問の数を絞り、円滑なセッションの進行を心がける。
●最初にプレゼンテーションの概要を話し、観客の興味をひきつけるとセッションがより面白くなる。

■報告者の感想

自分の興味のあることを発表するというテーマを頂いた。スライドには図表や、キャラクターなど用いてわかりやすく、シンプルに説明することが大事だと他の発表を聞いて感じた。また海外参加者がいる中で、日本人にとっての一般常識を英語で説明する事は非常に難しいのではないかと思った。7分間という時間の中で、観衆の興味を引き付け続けるためのスライド作りや発表の時の姿勢しゃべり方など、Sartorius先生からご教授いただけたことは非常に価値の高いものとなった。日常では体験し得ない英語でのセッションを完璧に理解することは難しく、質疑応答ができずに歯がゆい思いをした場面もあったが、同じ世代の精神科医師の発表を聞いているととても良い刺激となり、自分が体験したことのない世界を経験できたことにとても感謝をしている。

Meet the Expert: How to improve your presentation

順天堂大学医学部　外国語研究室　准教授
Marcellus Nealy先生

［報告者］
埼玉県立精神医療センター　清水　俊宏
医療法人社団新光会 不知火病院　中野　心介

■はじめに

英語教育の専門家であるMarcellus Nealy先生は、長年日本で英語教育や英語論文の作成指導を行ってきた。日本での指導経験を踏まえて、論理的な英文の作成方法の極意についてご講演いただいた。以下に概略を示す。

■講演内容

● Logical flow

英語論文をはじめとした英文書類を作成するにあたり注意すべき要素は、Logical flow（論理の流れ）、Connection of idea（概念の繋がり）、Grammar and vocabulary（文法と語彙）、Style and content（体裁）である。本講義では特に重要なLogical flowに焦点を当てた。

Logical flowとは、物事を伝えるために情報をどのような順番で並べるかを考えることである。“Writing（書くこと）”は“Story telling（物語を伝えること）”である。文法的なミスは多少無視してもらえるが、論理が破綻していたら読み手や聴衆を失う。相手に伝わりやすい論理的文章の特徴として、文中に提示された全ての考えが無理なく関連していること、関連性のない話題は一切除外していること、一つの段落で一つの考えを伝えていること、全ての文が文章全体の主張に関連していること、等が挙げられる。

● グループワーク“Life Boat”課題

次に、論理的文章を作る実践として“Life Boat”課題を行った。これは論理的思考を試す有名な課題であり、発表者の論理的能力が如実に現れる。

「**課題**」 あなたは客船に乗っています。すると突然船長から、「船が沈みそうです。救命ボートに乗ってください。救命ボートには水と食料があります。それ以外に持ち出せる所持品は3つまでです」と艦内放送がありました。さて、あなたは何を持ち出しますか。

参加者は5人ごとの小グループに分かれて議論し、意見をまとめた。このうち2つのグループが代表して意見を発表した。最初グループは「タオル、ライター、メガネ」を、次のグループは「防水シート、iPhone、iPhoneの替え電池」を持ち出すと答え、それぞれのグループがそれらの所持品を選んだ理由について発表した。Nealy先生は、提示された3つの所持品の妥当性などについて検討や指摘を促した。

“Life boat”課題において、目標となるのは「肉体的にもしくは精神的に生き延びること」であろう。目標のために必要な3つの所持品を論理的に説明することが求められる。論理的な文章を作るのは“Life boat”の所持品を“Package（積み荷）”にまとめるのと同じである。各々のParagraph（段落）が一つの積み荷であり、

積み荷を合わせて全体の文章ができる。積み荷の内容は整理されている必要がある。

●論理の宇宙の法則：　T＝P＋R³

“T = P + R³”すなわち、“Thesis = Position + Reason³”という法則が成り立つ。“Life Boat”課題においては、「肉体的にもしくは精神的に生き延びること」がPosition（目標）であり、「（生存するための）3つの積み荷」がReason（根拠）である。これらの要素が明確になれば、Thesis（主張）として「私は3つの積み荷があるから生き延びる」と明快に表現することができる。

●段落の作り方

論文においての“積み荷”は段落である。段落を形成する方法として以下が挙げられる。

1. Topic sentence（段落の要旨）
2. Explain or define topic sentence（主文の説明や定義）
3. Give an example（具体例の提示）
4. Explain relevance of the example（具体例の関連性や妥当性を説明）
5. Transition sentence（話題転換のためのつなぎ）
6. Give additional examples（次の具体例の提示）
7. Explain relevance of the example（具体例の関連性や妥当性を説明）
8. Conclusion or transition to the next paragraph（段落のまとめ、次へのつなぎ）

段落において最も重要なのはTopic sentenceであ

る。これは文頭で段落全体の内容を要約したものであり、最も伝えたいことがここで語られる。その内容は事細かにも一般的にもなり過ぎないものが好ましい。また、段落の中でその要旨の詳細が語られてゆく構成となることが望ましい。Topic sentence さえ固まれば、無理なく段落を作ることが可能である。

■感想

Nealy 先生は、陽気でリズムを刻むような口調に加え、豊富な例え話を交えて、明快に論理的な文章の作り方・話し方についてご講演された。参加者は論文作成の技術を楽しく生き生きと学ぶことができた。論文で伝えたい要素を絞り込む際は、“Life Boat” に乗せる“積み荷” を選ぶのと同じ覚悟で絞り込み、“積み荷” を適切な順序で提示することで、論文が物語として自然に伝わる文章となることを学んだ。“Life boat” 課題の経験はとても貴重な体験となった。今後論文作成をする際に、その経験はまさに助け舟となるであろう。

How to make a poster and poster session

The Association for the Improvement of Mental Health Programmes（AIMHP）代表
Norman Sartorius先生
医療法人すずらん会たろうクリニック 院長　内田　直樹先生

［報告者］
大阪府立病院機構 大阪精神医療センター　入來　晃久
慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室　澤田　恭助

■はじめに

ポスター発表は、学会等で医師が学術発表する際の最初の方法となることが多いが、1枚のポスターと口頭でのプレゼンテーションのみで他者に学術研究の全てを伝えることは難しい。ポスターをどのように作り、どのようにプレゼンテーションをするかを工夫することは、発表者のメッセージをより多くの人に、より正確に理解してもらうために重要である。CADP2日目午後に開催されたポスターセッションでは、JYPOのOBである内田直樹先生からポスター発表に関する講義をして頂いた後、参加者8名がそれぞれのポスター発表を行い、Norman Sartorius先生のご指導の下にディスカッションを行った。本稿は、当日行われた講義およびディスカッションの内容をまとめ、報告するものである。

■ポスター発表の目的

発表者の行った研究成果を売り込むことであり、メッセージを届けることである。

■ポスター発表のメリット

口頭発表と比較し、ポスター発表のメリットは複数ある。

1. アクセプトされやすい。

若手の精神科医にとって大きな学会で口頭発表の機会を得ることは難しい。しかしポスター発表であればアクセプトされる可能性は高い。

2. 聴衆の数が限定的である。

ステージに立ち多くの聴衆に対してプレゼンテーションをする必要がない。プレゼンテーションの時間も限定的か、あるいは与えられない場合もある。

3. ディスカッションの時間が豊富である。

口頭発表では参加者と長時間ディスカッションすることは難しいが、ポスターであればそれが可能である。

4. メッセージを多くの人に届けることができる。

ポスター会場にて、多くの人はゆっくり歩きながら数秒各ポスターを見る程度かもしれないが、多くの人がそのポスターを目にする。JYPOのOBである国立精神神経センターの大久保亮先生の言葉を借りれば、「ポスター発表は、魚釣りと似ている」。釣りの高い技術を持っていれば多くの魚を釣ることができるように、ポスタープレゼンテーションの高い技術を持っていれば、多くの聴衆を得ることができる。

■どのように人を惹きつけるポスターを作るか。

●基本

「2m離れても見やすく、発表者がいなくとも理解できること」が最も重要な事柄である。

●デザイン

学会ごとにポスターサイズの規定があるため、必ず

確認して作成する。聴衆の理解しやすいものを作ることが重要であり、よく知られた名前やロゴ、図を使うこと、目立つ写真や絵を使うこと、攻撃的な色を使わないこと、色を使いすぎないことなどを意識する。色使いとしては白地に黒字が基本であるが、背景色と文字色にはコントラストの強いものを用いることが重要である。同一の色には同じ意味を持たせると聴衆は理解しやすい。ポスター間でも、同じ施設のポスターや関連する内容に関するポスターは、色を揃えるなどの工夫が有用である。特定の製薬会社や薬剤を連想させる色使いにも注意を払う。

また全体の構成としては、聴衆の目線が上から下に動く様、構成は、1列で構成するのがベストで、2列はセカンドベストである。無駄な空白を作らず、重要な結果を示す図表を見やすく中央に配置するとよい。スライドを貼り付けたポスターは理解しづらい上見づらく、避けるべきである。

大まかな行数の目安としては、Titleは1行、Introductionは3行、Methodsは6行、Resultsは12行、Discussionは5行、Conclusionは3行を目安に書き、フォントサイズは最低でも36までとするなど、2m離れても見やすい文字の大きさや行間を心がける。

● Title

「魚釣り」の例えの通り、大きなポスター会場の中で聴衆の目を引くためには、第一にタイトルのインパクトが重要となる。5～8単語または50文字程度で1行に収まるシンプルなものが望ましい。Titleが長くなってしまうようであれば、副題をつけることも有用である。臨床疑問をベースとした疑問文のTitleも効果的かもしれない。Titleは最も伝えたいことや、主要な発見から成るべきであり、Titleで結論が表現できてしまう場合には、Conclusionは繰り返しになってしまうため不要である。発表者の連絡先は、Titleの欄内かすぐ下に配置した方が、それらを下方に配置するよりも目立ち、有用かも知れない。

● Methods

どのような研究デザインで、誰に対してどのような研究を行ったのか、簡便に理解できるような記載を心がける。あまり有名でない病気についてはその概要や、研究が行われた背景など、簡潔な補足事項を書くことは聴衆の理解を助ける。

● Results

重要な図表は目につきやすい位置に配置する。一目でわかるように大きさも十分に目立つサイズにすることが望ましい。また、付記している文字が小さくなりすぎないようにする。

● Conclusion

紙面は限られているため発表者の最も伝えたいConclusionは聴衆が目につきやすいように配置し、シンプルかつ分かりやすい記載をすることが重要である。紙面の上方に配置するのもよい。

■発表の準備に当たって

繰り返し発表の練習をすることが重要である。2分、1分、ときには30秒など、発表時間を限定しての練習は、伝えたい最も重要な事柄がシンプルになり、無駄な情報が削ぎ落とされるため、有用である。

■どの様に発表するか。

発表時には、主要なメッセージを強調して伝えることが重要である。研究の背景から枝葉末節を一つ一つ説明していくのではなく、伝えたい内容を厳選しシンプルな形とし、強調することが重要である。1つのポスターに、重要なメッセージは原則1つ、多くとも3つまでに止める。

■留意事項

- ポスターにメールアドレス、電話番号、SNSアカウントなどの情報を記載する。上述のように、ポスターのタイトル欄など、上方に記載しておくのが望ましい。
- ポスターのA4サイズのハンドアウトを用意し、参加者が持ち帰れる様にする。こちらにも連絡先は記載する。
- 修正液やハサミ、テープ、画鋲なども持参することが望ましい。

■終わりに

本稿では、内田先生の発表及びSartorius先生のご指導から、ポスター発表の持つメリットやポスター作成時の留意点、ポスター発表の事前練習や当日意識すべきことについてまとめた。発表の目的は発表者のメッセージを他者に届けることである。本稿に記載したポスター発表に関する知識を自身の発表素材に適用しながら、伝えたいメッセージをどうすればよりよく伝えられるのかを常に意識することが重要である。それらを熟慮しながらポスター発表に臨むならば、発表に触れた聴衆との豊かなディスカッションに繋がる可能性が高まり、ポスター発表はより意義深いものになると考える。

Meet the Expert: Interdisciplinary studies and collaboration

東京医科歯科大学大学院　精神行動医科学分野 教授
高橋　英彦先生

［報告者］
慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室　工藤　駿
神奈川県立病院機構 神奈川県立精神医療センター　伊津野　拓司

1. はじめに

高橋英彦先生は、健常者および精神疾患患者がどのようにして意思決定をするのか、その脳内メカニズムを検討する研究をこれまで先駆的に進めてこられた。東京医科歯科大学への着任直後であるばかりではなく、新学術領域プロジェクト「人工知能と脳科学の対照と融合」に携わる等、大変多忙な日々を過ごされている。また、JYPO黎明期のメンバーのお一人でもある。今回のご講演では、高橋先生 の臨床医・研究者としての幅広いキャリアについてお話いただいた。

2. 意思決定、ドパミンとノルエピネフリン

高橋先生は、1997年に東京医科歯科大学医学部を卒業後、同大学附属病院で研修を開始された。しかし、同時期に経験した統合失調症をはじめとする精神疾患の患者が、幻覚や妄想といった症状は消褪しても、社会生活がうまく行かないことを目の当たりにした。それで、精神・神経疾患の認知障害の研究について興味を抱くようになった。

人間の精神活動は知・情・意に分けられるが、当時の認知機能における研究といえば知に相当する部分の研究が主流であった。しかし高橋先生は患者の社会能力を考えるうえでの認知障害は、知のレベルにとどまらず、情・意の部分も含まれるのではないかと考えた。

2005年にメルボルン大学に留学後、2006年からは放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター の主任研究員となり、意思決定に関する画像研究に取り組まれた。その中で、脳内のドパミンとノルエピネフリンがヒトの意思決定に大きく関わっていることを報告で示唆した。具体的には、ドパミンについては線条体の D1 受容体密度が低い人ほど、低確率を高く、高確率を低く見積もる、つまり確率を歪んで認知するバイアスが強い傾向があることを示した。また、ノルエピネフリントランスポーター（Norepinephrine Transporter: NET）に着目した自身の研究では、視床のNET密度が低い健常人は、ギャンブルにおいて予測される損失の金額よりはるかに高い利益が見込まれないとギャンブルに参加しない、つまり慎重に意思を決定する傾向があることを示された。

3. Ant, Dragonfly, Human Being

高橋先生が人生において感銘を受けた言葉として、伊藤忠商事現会長である丹羽宇一郎氏の「君はアリになれるか。トンボになれるか。そして、人間になれるか。」という言葉を我々にご紹介下さった。この言葉には、以下のような意味が込められているという。

- 社会人になって最初の10年は「アリ」のように泥まみれになって這いつくばるが如く、仕事を必死にやるべきである。
- その次の10年は経験を重ねて役職がついてくるため、「トンボ」のように複眼的な観点から物事を見ることを心がけ、さまざまな角度から検証していく視点、あらゆる可能性を探る姿勢を大事にするべきである。
- それが終わるとリーダーとなることが多くなるため、リーダーに求められる温かい心を持った「人間」になるべきである。

高橋先生自身は、今はトンボとして毎日を過ごし、早く人間になれるよう毎日邁進している、と謙遜されながら話された。

4. 終わりに

以上のように、意思決定のメカニズムの研究を中心として、高橋先生のこれまでのキャリアについてご講演いただいた。質疑応答では会場から「高橋先生のように多くの分野に携わり、それぞれとコネクションを維持するにはどうすれば良いか」という質問が挙がったが、高橋先生は「維持したいとは思っていますが、私もできていないのが現状です」と微笑みながらお答えになった姿が印象的であった。多くの功績を残されてきた一方で自らを飾り立てない純然とした人柄は、我々に感銘を与えてくださった。大変学ぶことの多い、刺激的で充実した講義であった。

How to present a CV and motivation letter

The Association for the Improvement of Mental Health Programmes（AIMHP）代表
Norman Sartorius先生

［報告者］
埼玉医科大学病院 神経精神科・心療内科　倉持　泉
京都府立医科大学 精神医学教室　渡辺　杏里

■はじめに

本プログラムでは、Norman Sartorius先生より、履歴書（Curriculum Vitae: CV）とMotivation letterの基本的な書き方、作成にあたっての注意点などに関してご講演いただいた。

■CV

1. 装丁

パソコンを用いて作成し、質の良い紙に黒か深い青色で印刷する。フォントサイズは14程度。文字が小さすぎると読みにくいが、大きすぎても貧相に見える。文字の配置をそろえ、空白が多くなりすぎないようにする。

2. 内容

1）Identification（身分証明）

フルネームで姓名を記載する。現住所だけではなく、職場、出生地、市民権・国籍、婚姻歴なども記載する。また、先方が電話連絡する際に通じなかった場合を考え、電話番号は2か所以上書くとよい。

2）Personal information（個人情報）

医師免許や専門資格を取得した年などを記載する。生年月日は、米国では記載しなくてもよい。顔写真は提出先からのリクエストがあれば載せる。日本国内の緊急時連絡先（本人との関係）も記載する。

3）Education（学歴）

大学以降どのような専門教育を受けているか

(Faculty of Medicineなど)、学位があれば記載する。

4) Employment history (職歴)

基本的には大学卒業後の医学的な研修(Post Graduate Training)について古い順に書くが、National Institutes of Health (NIH)のように新しい順で書くよう求められていることもある。提出先がどのような記載を求めているか確認する。

5) Research experience (研究経験)

専門的な研究機関や研究室に所属をした場合は、その場所と研究内容を記載する。

6) Skills (技術)

専門資格、学会で認定された専門技術を記載する。日本の医師免許(Japanese M.D. License Registration)や、精神保健指定医(Designated psychiatrist: Japan Mental Health and Welfare Law)などもこれにあたる。教育経験・資格(職位)、治療技術(救命措置、心理療法など)、自身のプラスになるものは記載する。語学に関してはSpeaking, Writing, Understandingの能力、fluentlyなのかどうかを記載する。英語技能検定試験の結果があれば記載してもよい。

7) Other relevant assets (e.g. grant obtained)

研究費や奨学金をどれだけ取得しているか、留学に際し何らかの助成金を得ているか、また賞罰などを得た経験があれば記載する。

8) Publications (論文・研究発表)

査読ありの論文(Peer Reviewed)を先に書く。論文報告が多い場合は、自分が最も興味を持ち研究したいと思っている内容のもの3本を載せる。論文は基本的に学術誌に受理されており、雑誌が発行されているか、何らかの手段で読むことができるもののみを記載する。学会発表経験のみである場合は、それを記載する。余白があれば査読なしの総説(Non-Peer Reviewed)などを記載してもよい。

9) その他

趣味・特技などを記載する必要なく、ユーモアを交える必要もない。英語のスペルミスは絶対にしないようにする。CVは単純かつ明快であるべきで、論文や他の関連資料が新たに増えた場合は常に内容を更新しておくとよい。

■Motivation letter

Motivation letterは差出人を表現し、意欲を伝えることができるものである。手紙の冒頭で、参加したい講習会の主催者や留学希望先の教授などにあてた文章にする。Dear Sir or Madam、よりもDear Professor Sartorius、という書き出しの方が、相手への敬意が感じられ、差出人に対してよい印象を持ってもらえるだろう。

あいさつに引き続き、My name is ○○など、名前を改めて記載する必要はない。手紙の最初に自分の名前を名乗っても、礼儀正しいとは受け取られない。自分自身がどのような人物であるかを相手が判断できるように自己紹介し、それに続いて要件を述べるようにす

る。

要件において、講習会などへの参加希望については、いつ開催される予定の、なんという会に参加したいのか記載する。手紙を受け取る側は多数の講習会を企画していることが多いため、参加したいというだけでは対応できないことがある。

その後は、全体が3段落程度にまとまるよう、差出人がこれまでどのようなことに興味をもってどのような活動を行い、なぜ目的の講習会に参加（留学）したいのか、そして参加することによってどのような「よい」変化が生じる可能性があり、差出人が将来に向けてどのような展望をもっているかなどを、簡潔に記載する。

最後に、返信や、許可を求める際、命令調で記載することは望ましくない。My curriculum vitae lists my address but I am listing it below to make it easier to ensure that I can be reached immediately should additional information be necessary. などと最後に付け加えて終わることが望ましい。

■報告者の感想

日本では当たり前のように丁寧だと考えられている表現が、国際的な視点で見ると必ずしもそうではないことが多くあることを学ぶことができた。今後、海外留学や海外の研修会への参加に向けて、日本以外の医療機関、大学などへ提出する書類作成の基本事項確認は、有意義であった。今回のプログラムで学んだことを、今後の活動に活かしていきたい。

How to be elected

The Association for the Improvement of Mental Health Programmes（AIMHP）代表
Norman Sartorius先生

［報告者］
福岡大学医学部 精神医学教室　増田　将人
三重県立こころの医療センター　久納　一輝

■はじめに

3日目の午前の本プログラムでは、Norman Sartorius先生より、選挙で選ばれるにはどのようなスピーチをすればよいか、講義をしていただいた。折しも、当日はヨーロッパ精神医学会で理事選挙が行われていた最中であり、そこから着想を得て企画されたプログラムであった。

■事前準備

CADP開始前に、報告者を含む3名の参加者が、Sartorius先生から与えられた下記の指示に従って、スピーチの準備を行った。

- スピーカーに共有されるのは、『国際的な若手精神科医の会の理事に選任されるための2分間スピーチ』という点のみであり、スピーチの要素についての例示はしない。
- 履歴書等の補足文書は使用しない。
- パワーポイントも使わない。

■講義内容

はじめに、事前に準備を行っていた3名が各々2分間のスピーチを行い、その後、Sartorius先生の発案で参加者全員による投票が行われた。

その後、それぞれの発表者に対するコメントが参加者から寄せられ、最後にSartorius先生から選挙演説の仕方や選挙で考慮すべきことをご講義いただいた。

●時間

時間は必ず守らなければならない。ヨーロッパの学会では、制限時間を超えると強制的に終了させられる。

●姿勢

身体は動かしすぎない方が堂々としていて良い。攻撃的なボディーランゲージは控える。

●アピール

自分の性格に合わないような無理なアピールはしない。おとなしい人ならおとなしいなりに、無理に明るくふるまおうとしない。自分が、掲げる目標や行動をするに値する人物であることをアピールする。

●前任者の評価

前任者について知り、その成果をよく理解しておく。

●メインメッセージ

メインで伝えたいことは「はじめ、中間、終わり」の3カ所で述べて強調する。

●投票者

投票者がいかなる人物たちかを知っておく。彼らの先入観や偏見を知り、彼らに残るスピーチの記憶は偏ったものになりうることを心得る。

●ペンフィールドの法則

参加者の人数の平方根（16人の投票者なら4人）を自分の味方につけておけば当選する確率が上がる。

■報告者の感想

若手精神科医の会の理事への立候補を想定していたため、当初は発表を担当することに戸惑いもあったが、せっかくの機会なので応募した。少ない条件の中で、テーマを明確にし、やりたいことを一つ、自信を持って述べることをこころがけた。Oral presentationとは違った緊張感の中、やり切ったことに対して一定の度胸と自信がついたように思う。しかし、実際には練習通りスムーズに言えなかったり、時間を守れなかったりと、心残りの部分は多かった。

「20回、30回と練習しなさい」

セッション後にSartorius先生にご指摘いただいた。「発表練習はエクササイズである」と。そして、やはり最後までぬぐえなかったのは、発表の内容が新人の自分たちにはまだまだ見合っていないという事実だ。発表の方法も、そして内容も、一朝一夕には身につかないし、身の丈にあったものにならない。長い訓練が必要である。

How to prepare a meeting of a committee

The Association for the Improvement of Mental Health Programmes（AIMHP）代表
Norman Sartorius先生

［報告者］
医療法人社団新光会 不知火病院　中野　心介
国立病院機構 琉球病院　吉田　和史

■はじめに

CADP　3日目午後の本プログラムでは、Norman Sartorius先生より、どのように会議を設定し、開催するのが望ましいかについてご講演いただいた。下記に概要を示す。

■アジェンダ（Agenda）を準備する

会議の準備としてアジェンダを作成し、参加予定者全員に送付されることが望ましい。そこに記載すべきことは、予定されている日時、会議の背景に必要となる資料、到達目標について記載するべきである。これに関係ないものや雑言の類を記載すべきではない。アジェンダは表で記載するなどしてなるべく簡潔な文章とし、議題とすべき項目は多くても5つとすべきである。注釈を有効に活用することも、簡潔な表現には望ましい。

■どの席に座るか

会議机と番号を振った席の模式図で、会議において司会者がどの席に座るかが重要であることを示した。

後ろにドアがある席に座ると、重要な発言をしたいときにドアが開いて伝えたいことが伝わらないかもしれない。窓を背にした席に座ると、ほかの参加者からはまぶしくて自分の表情が分からなくなってしまう。後ろの障害がなく、全体を見渡せる席が望ましい。

■会議の開始

司会者（Chairperson）として会議を開始するにあたり、まずは自身の挨拶においてすべての参加者に対し誠意をもって歓迎すべきである。次に簡潔な言葉で会議の目的を示し、どのような行程で会議を進行するのか言及しなくてはならない。会議の開始が宣言された後は、あまり形式ばらずに自己紹介を交わしたうえで、参加者の名前の発音を途中で間違えることが無いよう、最初にしっかり確認しておくべきである。司会者は参加者の誰と誰とが親しい会話をしているか注目すべきである。

■会議の進行

会議は長くても90分で、60分程度が望ましい。時間が長くなると眠る参加者が出てくるし、イライラして口論になってしまうことも起こりうる。司会者はそのような時に休憩を設けるべきである。適宜要約（Summarize）を行うことでも場を沈め、会議を前に進めることが可能である。ソシオグラム（Sociograms）を利用し、参加者のそれぞれの関係性を図表化することも会議の進行に有用である。

■避けるべきこと

会議の設定や進行に際し回避すべきこととして以下

の事項が挙げられる。

●参加者の席や位置を変えること。
●室内の備品など会議の妨げとなるものを会議中に移動すること。
●公の場にふさわしくない会話。
●了承の無い司会者の交代。
●大きすぎるアジェンダ。
●同じような内容の会議が何度も繰り返されること。

■会議の終了

会議を終了するときには、司会者は結論をまとめ、今後の方針や行程を決定すべきである。その後に、すべての参加者と準備してくれた人に謝意を伝える。この場面で簡潔に次の会議のホスト役を呼びかけることもしばしばありうる。会議のレポートを作成するため、司会者は会議の途中から結論や決定事項について記録の形作りを始めておかなくてはならない。会議の終了時にすべての参加者がこの会議に参加して良かったと感じるとともに、今後の方針が明確に共有できていることが望ましい。

■講演の結語・質疑応答

司会者はまずアジェンダの作成に尽力すべきであり、そして会議においては、司会者はいつも会話の外側（Outside of the meeting）に立って参加者の議論を傾聴し、会議の要約を心がけてゆくべきである、と述べられて講演は締めくくられた。質疑応答は多数に及んだ。オンライン会議についてはあまり議論には向かず、決定事項の確認等に使うような目的の方が望ましい、との指摘があった。話の長くなりがちな人や話すことに躊躇いのある人などへの対応は、90％が事前のやりとりや事後のフォローにあると説明されていた。

■報告者の感想

本講義で扱われた「会議」は、学術会議や学会における各種委員会を想定したものであったと思われる。しかし、今回御教示いただいた「司会者の役割」というものは、勤務する病院のカンファレンスや医局会、そして帰宅後の家族会議までも含めて、「会議」と名の付くすべての場面で適応可能な、汎用性の高いものであると感じた。

Special Session: Post CADP “GO-EN” Project

［報告者］
大阪大学医学部附属病院　片山　直毅
公立豊岡病院組合立 豊岡病院　安藝　森央

■はじめに

今回、18thCADP大会長・副大会長の主導で、“GO-EN” Project と銘打ったグループワークを行った。CADP参加者間の繋がりは、ともすればその場限りのものとなってしまいがちであり、その繋がりを維持するには、繋がりを継続的に活用し強化していくことが必要である。“GO-EN” Projectは、“御縁”プロジェクトと邦訳可能で、CADP参加者間の繋がりを維持し活用していく企画である。

■内容

まず、参加者は4名ほどの小グループに分かれ20分ほどのグループワークを行い、CADP参加者間の繋がりを活用する企画を複数考案した。その後、グループワークで考案した企画の内容をグループの代表者が発表した。

発表された企画をいくつか例に挙げてみる。「交換留学を行う」「メンバーが海外旅行を行った際に、ブログのように思い出を共有する」「メンバーが旅行した際にメンバーの家を貸し出す旅行クラブを発足する」「2020年に開催されるバンコクでの世界精神医学会の前に、観光旅行を行う」「2020年に開催されるバンコクでの世界精神医学会の際に、オーケストラコンサートを行う」といった異文化コミュニケーションを活用するものから、「2020年に開催されるバンコクでの世界精神医学会の前に、精神医学の文化間の違いを共有するセッションを行う」「年に1回、若手精神科医の国際会議を開催し、症例検討会を行う」といった精神医学に関連したもの、「月に1回、口頭でのプレゼンテーションの発表会をオンラインで行う」「互いに連絡を取

り合い、各地の学会情報の情報を共有するFacebookグループを作る」といったJYPO・CADPをはじめとした学術会議活動に関連したものまで、さまざまな企画が考案された。

最後に、今回のグループ分けに従って、考案した企画達を実行するためのFacebookグループを実際に作成した。以降の“GO-EN”Projectは、Facebookグループの中で行われることとなった。

■報告者の感想

せっかくの繋がりがその場限りになってしまうというのは、確かにもったいないことであるが、良くあることであり仕方ないものと考えていた。この問題に正面から取り組む本企画は非常に斬新で刺激的であった。挙げられた企画の中には、すぐに実行できそうなものから、労力が必要であるが非常に魅力的なものまで幅広く含まれていた。個人的には、オンラインでの口頭プレゼンテーションの発表会が、実行可能性が高そうで、CADP参加者の能力を特に活かせそうであり、興味を惹くものであった。もっと時間をかけて詳細に各企画の内容を詰めたかったが、CADPのタイトなスケジュールの中では時間に限りがあり、今後Facebookグループでさらに議論が広がり、ブラッシュアップされていくことに期待している。

Evaluations of the 18th CADP and Farewell Remarks

The Association for the Improvement of Mental Health Programmes（AIMHP）代表
Norman Sartorius先生

［報告者］
千葉県こども病院　河岸　嶺将
医療法人桜花会 醍醐病院　福島　弘之

■はじめに

Evaluations of the 18th CADP and Farewell Remarksでは、3日間のProgramが無事終わったことに対して、講師も含めた参加者全員が一言ずつコメントを述べ、互いに健闘を讃え、感謝の意を示した。すべての参加者のコメントを掲載することは適わないので、Norman Sartorius先生から最後に頂いたコメントの概略を記す。

■Norman Sartorius先生より

毎年この会に参加し、新しい人に出会い、旧縁を温めることができることを大変うれしく思います。特に佐藤先生、高橋先生は初回CADPからの貴重な記憶を思い出させてくれました。これまで私がみてきた講習のなかで、このように以前参加した参加者が何度も来るようなものは世界に類をみません。様々な分野を超えて、世代を超えて力を合わせることはとても素晴らしいことです。私としてはこのような素晴らしい会が継続し、他国にも広がればとは思っていますが、それはとても難しいことであり、だからこそ皆様に尊敬の念をいだきます。

参加者の皆さんには、今回の講習だけの付き合いだけではなく、ぜひその枠を超えて友人になっていただけたらと思います。このような付き合いが続き、ネットワークとなるように努力してください。GO-EN Projectはとても面白い企画だと思います。

なぜCADPには過去の参加者が繰り返し参加し、人気があるのでしょうか。私は自分自身を見つけることができるからだと思います。自分の話し方がまだまだ途上だと感じる人もいるでしょう。また、批判的なコメントに対応することの難しさを認識する人もいることでしょう。自分自身を見つけるというのはとても重要なことだと思います。なぜならそれはときに何年もかかり、自分自身を信頼するきっかけとなるからです。自分自身を知り、力強く、やれることをやる、それがキャリア形成に欠かせません。残念ながら、世界の多くの講師は皆さんに自分自身を信頼するようにとは言いません。しかしながらCADPは皆様の年齢から他の人たちと違い自分自身で何ができるか、恥ずかしがらずに批判的なコメントを行えるようになり、落ち込むことなく他の人のコメントを受け入れられるようになります。これらは人生の中で何かを学ぶことに欠かせないことです。

皆様の年齢でキャリア形成をする段階において、第一に考えなければいけないのは相互信頼できる社会ネットワークです。それを拡大し、広げることで周囲から力をもらい、アイディアをもらえるでしょう。またそれらが、必要なことを思い出させてくれるでしょう。

大会長・副大会長をはじめとした運営委員のみなさ

んがこのような素晴らしい会を準備し、運営していただいたことを労いたいと思います。特に大会長の福島先生の仕事には感謝の意を示したいと思います。

さて、今日この後、みなさんにしていただきたいことが2点あります。

1つ目は、ここで学んだことは他の人に教えていただきたい、ということです。他の人に教えることでコメントをもらい、自分自身も楽しみ、他の人を助けることができるようになります。

2つ目はここへ来ることを許してくれた皆様方のご家族に感謝の意を示すようにしてください。何人かの皆様は小さい子供もいて、配偶者や他の家族もいるでしょう。このような会に参加できるように時間を与えてくださり私も感謝を示したいと思います。

皆様がまた来年来ていただければと思い、来年といっても12ヶ月後ですが、その間に友好を温めていただければと思います。

■報告者の感想

報告者は昨年も参加したが、今年も参加することで、複数回参加された諸先生方と再会することで友好を温めることができた。Sartorius先生がおっしゃるように自らが参加し運営すること、ネットワークを維持し続けること、新たに様々な企画に参加することで新たな自分自身を発見できるかもしれないと考えた。参加者全員が参加者同士に感謝を伝え合うという類稀な時間を過ごすことができた。

Evaluation of the 18th CADP and Future Prospects for the 19th

［報告者］
千葉県こども病院　河岸　嶺将
医療法人桜花会 醍醐病院　福島　弘之

■はじめに

18th CADPの3日間の日程を終え、国内参加者のみで日本語による反省会が行われた。都合により途中退席した参加者もいたが、ほぼ全員の国内参加者が反省会にも参加した。初回参加者と複数回参加者にわかれ、「良かった点」及び「改善すべき点」について話し合った。

■初回参加者からの意見

「良かった点」として、過去3年続いた幕張から変更した今回の会場である海外産業人材育成協会 関西研修センターが、関西国際空港からも近く、新大阪駅からも近く、会場も広かったことが挙げられた。

「改善すべき点」として、開始前のオーラルプレゼンテーションの動作確認が上手くいかなかったこと、スケジュールが過密であり、特に初日のSGWの内容がつかみづらく、SGWのグループによって作業量が異なったことが挙げられた。ポスターセッションに関しては、今回は発表者が多かったのでセッションが長引いてしまったこと、ポスターの前の長机がポスターを閲覧する際に邪魔になったこと、評価の時間が足りなかったことが挙げられた。また、事前グループの班によってオーラルプレゼンテーションについての情報共有に差があったこと、パンフレットの席順が見づらかったことについても改善が望ましいとの意見が出た。

■複数参加者からの意見

「良かった点」としては必要な情報を網羅している「参加のしおり」を昨年から引き続き用いたこと、が挙げられた。

一方、「改善すべき点」についても様々な意見が出された。国内参加者同士の情報伝達は現在はメールのみの運用となっているが、他のウェブサービス（例えばSlacks、LINE、メーリングリストなど）を用いることについて検討された。また、オーラルプレゼンテーションのスライドのアスペクト比が発表者によって異なり、発表者によっては不利になったこと、庶務（ポインターを誰が準備するか、スライドの事前準備やホテルとのやり取りを誰が行うかなど）の担当者が不明確であり、細かい点まで仕事の明確な分担をすべきであったことなどが挙げられた。また、SGWの時間が十分に取れなかったことや、会場に門限があり、一部の参加者が十分に交流できなかったことなどが挙げられた。

■報告者の感想

終始活発な議論がなされており、参加者全員のCADPに対する強い情熱を感じた。多くの複数回参加者は同時に運営に携わるため、運営する側としての改善点についての意見が多数あった。その一方で、初回

参加者は忌憚のない意見を述べることで、複数回参加者が気づきにくかった点を気づかせてくれたことが印象的であった。参加者自身が運営し、改善すべき点を指摘し、記録し、伝達することで、CADPがよりよい会として発展していくことを再認識した。最後に参加者全員の再会を約束し、18th CADP の全プログラムを終えた。

Remarks from the overseas participants

Chung Hin Willy Wong先生

Hong Kong Psychiatry and Integrated Medical Centre

This has been my second time to participate in CADP. My experience this time was different from the first time which was held in Chiba. It was good to learn from exchange of knowledge among participants from different countries. The oral presentation was not merely a way to learn and refresh effective presentation skills, but it was also an opportunity to learn from the topics of the presentation. Some of them were cultural-specific. The poster presentation session was also very fruitful. I enjoyed the small group work activity too. The theme was about creating an electronic application for a chosen psychiatric care aspect. This was in line with this era of high technology and high prevalence of use and dependency of mobile phones and computers. The whole CADP program was very organized with the good arrangement before the program and feedback after it. The parties after the academic program enhanced further communication and exchange between the participants.

After the 18th CADP, I am looking forward to maintaining friendship and academic exchange with the other participants. Much more could be done through collaboration between psychiatrists across different countries. This was a wonderful academic program in the field of psychiatry. This could certainly benefit the development of every participant.

Nitchawan Jongrakthanakij先生

NorthEastern Institute of Child and Adolescent Mental Health

I heard about the CADP course from my teachers many times. So when I had time, I did not hesitate to attend this course. I did not know much about this course but I only knew that this course will change your life for the better. So when I knew that I can attend this course, I was very happy that I could have this opportunity. At the same time, I felt very nervous because I am not good at English and presentation skills.

This was my first time attending an international meeting and also the first time I had to make a presentation in English. I only had little time to prepare for this presentation which made me disappointed. I did not do well in an oral presentation but all the participants and Professor Norman Sartorius gave me a lot of encouragement that made me feel better and help me to improve myself.

Before coming, I was always anxious when I have to do a presentation but this event helped me to overcome my fear and gained many skills.

I learned a lot of skills, such as how to present and create a poster, how to tell someone a story via presentation, how to give others feedback and how to do small group work in a short time. I gain more confidence after 3 days and feel empowered to keep developing myself. I love all the lectures that this course provided. Especially, Prof. Sartorius's lecture that taught me how to write a CV and how to write a motivation letter. They were very useful to me. The atmosphere in this meeting was warm and filled with kindness. Everyone was so friendly to me and to other foreigners. Even though we could not use English fluently, we could communicate with one another well. Thank you for understanding and helping me to improve my speaking.

Thank you so much to all the staff who made this meeting so successful and efficient. You all dedicated

yourselves so much arranging this meeting and made us feel so impressed with the meeting. I hope to see you all again in the next events. Thank you for the fate that I could meet Prof. Norman Sartorius and could learn a lot of precious things for self-improvement.

Maytinee Srifuengfung先生

Department of Psychiatry, Siriraj Hospital, Mahidol University

It was the first time for me to participate in the Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP) and also my first time in Osaka. During the 3-day course, I have developed substantial academic skills and had an opportunity to meet and discuss with young psychiatrists from Japan, Poland, Belgium, Hong Kong and also psychiatrists from my country, Thailand.

I enjoyed the oral presentation the most because I learned medical practices and cultures from many countries. In addition, I received precious comments from experts and colleagues during my presentation. In my opinion, knowing your strengths and especially weaknesses is critical for mind growth and career development. The session provided a comfortable environment that participants had the courage to give comments to others. Even chairpersons benefited too!

I learned a lot from Professor Norman Sartorius who helped improving academic skills e.g., how to write a curriculum vitae, prepare for research poster presentation, how to be elected in an organization and prepare a meeting. I am greatly impressed by Prof. Sartorius's passion and dedication to young psychiatrists from all over the world.

Events from outside classroom astonished me. During the break, I appreciated chatting with participants from overseas and tried their hometowns' snacks. I loved the dinner party. This was the first time for me to know what happened on Valentine's Day worldwide.

Lastly, I admired the professional arrangement of the 18th CADP committees for perfect coordination of the schedule before and during the course. Thank you Japanese friends for talking to me in English and the more impressive thing to me was they talked to each other in English, how professional! I strongly recommend young psychiatrists to join the CADP because it is not just the first perfect step for your career but also a strong motivation step.

Pichaya Pojanapotha先生

Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University

Joining CADP is my precious memorable experience. At first, I was quite excited since this is my first time to attend international workshop. I was worried if I could understand lectures and instructions ...if I could connect with others ...if I did something embarrassed ... so many worries. However, when the program started there was no time to think, the schedule was tight, and I was surprised that we were mostly on time as it was planned. This course is very intensive and challenged.

Working with Japanese friends is great- they are good planner, punctual, diligent, and friendly. They always push themselves to do their best and this made me feel like "I want to be better and better". JYPO is such a

wonderful organization. I was impressed that all of the venues was held by these fantastic young people and this made me think that in the future we will have some kind of this association in Thailand as well. At the moment, Thai young psychiatrists who had joined the program are connecting and we are trying to do something.

Prof. Norman Sartorius is a great teacher. I think I am so lucky to have a chance to be his student. I learned not only the content, but also the way he taught. His talk was powerful and inspiring. All other lecturers were also great, it is cool that some of them were once being trainees in CADP like us. Their journeys in career path were motivated. Moreover, it is really nice to hear stories of development from someone who came for 2nd, 3rd, or 4th time in the program.

At the end of the day, I learned that when I was nervous, the others felt more or less the same and that worries fade as we shared. I learned that I am part of the group, I could contribute, share, or discuss without being hated. Vice versa, I did not have to defend myself from negative comments. We were from different places, we had different points of view, but we had a lot in common- we are eager to learn, we want to improve, and we need help to do that. Now we know we ourselves could help each other to get better, we believe that we could do more than we have ever thought – this is the most important thing I learned in my 1st CADP.

Camille Noël先生

Saint-Luc University Hospita and La Petite Maison ACIS

As an overseas participant in the Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP), I feel very honoured and lucky to have the privilege to take part in this awesome course.

It was an honour for me as a Belgian psychiatrist to meet Japanese colleagues and learn from them. As many do, I very much value the Japanese culture and way of working. I feel very touched by this event.

All Japanese colleagues were so kind and welcoming and make you feel well at the CADP. I was very glad to exchange with each other about our practices.

The sessions taught me a lot and the participants were very conscientious to help each other with oral and written comments on our presentations or posters, and I thank them very much for their very helpful comments. After this training, I feel more confident in professional skills such as oral presentation, poster, election speech or project application, which are highly helpful in our profession but taught in no other occasion than this course. Professor Sartorius and the Japanese mentors are inspiring figures who make us confident in our desire to grow as psychiatrists and to follow our professional values and dreams.

It was also great to exchange informally with participants through cultural parties that made us become friends.

The CADP made me want to go on collaborating with the participants as well as to hope to come back to Japan and to welcome them to my country. Having met such nice and motivating colleagues, I do hope that we will have the opportunity to collaborate with each other and to build together something contributing to the populations' mental health. To this end, I am happy that the GO-EN project emerged to encourage CADP participants' professional and informal collaborations.

It is very nice that it is possible to apply again for a next CADP and then to take part in the organisation of the course. As the 18th CADP made me want to apply again, I hope to have the pleasure to meet again some of the highly appreciated colleagues met this year.

I would like to wholeheartedly thank all the people who make the CADP possible and thus enable international professional encounters, collaborations and relationships, contributing to shape the future of psychiatry. « If you want to go fast, go alone; if you want to go far, go together ».

Andrzej Minor先生

Psychiatric Hospital in Straszęcin

When I entered the conference room for the first time, I saw a big table decorated with variety of sweets gathered by participants – it could be an allegory of great hospitality and a valuable experience I received during the 18th CADP.

In the beginning, everybody got familiar with the conference schedule, provided booklets with necessary information were placed at desks, the chairman has explained their content.

The first exercise helped to break the ice with each other – we were asked to introduce a person sitting at the right – it was an opportunity to learn basic facts about all participants, find common interests. I felt more comfortable then.

Except for professional lectures and advice from experts, I think that one of the most precious lessons was to learn how to take and give constructive criticism, see the positive side of it. We could collect information from our and other's mistakes.

After the first day of the conference, we had a reception party which gave us a lot of fun and made our bonds stronger.

It was a kaleidoscope of great DJ-work, delicious Japanese cuisine, humorous Valentine's Day Quiz, surprising Rock-Paper-Scissor game with costumes and gadgets.

Personally, I regret that we didn't dance together like in "Saturday Fever Night", but I understand that it was due to cultural differences ☺.

I really liked the idea of group work, it was another opportunity to get to know each other better and develop interpersonal skills.

The 18th CADP confirmed my concept about Japanese professionalism, everything was working like Japan train system, just perfect.

As a summary, I would like to share, that I came back to Poland with a strong will of attending next CADP.

Thank you for everything!

Sartorius Award for Best Presenter in 18th CADP

CADPでは、毎回参加者全員によって、オーラルプレゼンテーションとポスタープレゼンテーションの評価スコアが付けられ、最終日にそれぞれのBest Presenterが発表される。

18th CADPでは、16名のオーラルプレゼンテーションと8名のポスタープレゼンテーションの中から、下記の2名が選ばれた。

■Sartorius Award for Best Oral Presentation

松岡　秀樹

（福岡大学医学部　精神医学教室）

■Sartorius Award for Best Poster Presentation

渡辺　杏里

（京都府立医科大学　精神医学教室）

19th CADPのご案内

19th CADPは、下記の要綱にて開催を予定しております。
この報告書を読まれてCADPに興味をもたれた先生方、是非ともご参加いただけますと幸いです。
正式な募集は7月頃から行う予定としており、全国の医学部精神医学教室や研究機関などにご案内を送付させて頂きます。
JYPOホームページ（http://www.jypo.org）にも随時情報を掲載していきますのでご参照ください。
また、参加者だけでなく、19th CADPの準備、運営に携わってくださる方も募集しています。ご興味をお持ちの方、ご質問がおありの方は事務局までお問い合わせください。

日　　程: 2020年2月14日（金）午後～16日（日）　※予定
場　　所: 東京（調整中）
講　　師: Norman Sartorius先生他、海外および国内講師数名
募集時期: 2019年7月～9月
募集人数: 約35名（海外参加を含む）

認定特定非営利活動法人　日本若手精神科医の会（Japan Young Psychiatrists Organization: JYPO）
19th CADP 運営委員長　安藝　森央（公立豊岡病院組合立 豊岡病院）

お問い合わせ先: 認定特定非営利活動法人　日本若手精神科医の会（JYPO）事務局
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町1-9-2
株式会社メセナフィールドアークス内
E-mail: jypo@mecenat-net.co.jp　　TEL: 03-5651-7105　FAX: 03-5651-7106

JYPO参加募集案内

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会に参加しませんか？

認定特定非営利活動法人　日本若手精神科医の会（Certified NPO-JYPO）では、新しいメンバーの参加をお待ちしております。

■JYPOとは

本会は、精神科医療の専門性を確立し、精神科医療に必要とされる教育研修を提供し、さらに精神科医療の発展に資する研究の促進のための活動を行い、国内外の精神科医との情報交換や啓発活動を行い、もって日本国内及び各国で生活する精神疾患をもつ人達、その家族、さらには地域のニーズに応える精神科医を普及させることを目的としております。

■会員の特典

①本会の開催する研修会や会合に参加できます。
②メーリングリストへの加入ができます。
③臨床・研究・教育など、多岐にわたる若手向けの有用な情報が得られます。

■正会員（入会金3,000円、年会費5,000円／入会期間：6年間）

●若手精神科医会員
・医師免許を有する日本精神神経学会精神科医の会員であること
・入会時、医学部卒業後12年以内の精神科臨床研究に関わる医師であること
・入会時、精神科臨床経験が10年以内の医師であること
●学生会員：日本の医学部医学科に在籍していること
●研修医会員：日本で初期臨床研修中であること
＊学生、研修医会員の方は、年会費が無料となります。
＊また、学生・研修医会員の在籍期間は6年間に含みません。

■賛助会員（入会金5,000円、年会費　一口10,000円）

本会の目的に賛同、援助をしていただける、個人、企業、または団体様

■申し込み方法

①オンラインによるお申込み
JYPOホームページより、オンラインにて入会をお申し込みいただくことも可能です。
＊JYPOホームページ：（http://www.jypo.org）
＊ご入会についてのページより会員申込画面へお進みいただき、必要事項を記入のうえお申込みください。
②FAXによるお申込み
JYPOホームページから入会申込書をダウンロードしていただき、必要事項をご記入のうえ、FAXにて事務局までお送りください。　＊併せて次ページをご参照ください。
＊ホームページ（http://www.jypo.org）もご参照ください。

〈お問い合わせ先〉

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会（JYPO）事務局
〒103-0025　東京都中央区日本橋茅場町1-9-2
株式会社メセナフィールドアークス内
E-mail: jypo@mecenat-net.co.jp　　TEL: 03-5651-7105　　FAX: 03-5651-7106

FAX: 03-5651-7106　認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会事務局宛

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会　入会申込書（正会員）

年　　月　　日

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会
理事長　殿

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会会則に賛同して入会を希望し、正会員として入会を申し込みます。入会が決定しましたら、会則に従います。

氏（ふりがな）名	
生年月日（西暦）	年　　月　　日
現住所（ふりがな）	
Tel/Fax	
E-mail	
勤務先（ふりがな）	
勤務先住所	
勤務先Tel/Fax	
学　　歴	年卒業
医師免許取得年月日	年　　月　　日
職歴・研究歴	
JYPOのことを どこで知りましたか？	
入会の動機や今後JYPOで 行いたい事を教えて下さい。	
専門分野・興味のある分野	

理事長承認年月日　　令和　　年　　月　　日

協　賛

後援および協賛団体（2019年3月31日現在）

本会開催にあたり、多くの皆様からご後援およびご協賛いただきました。
ご支援・ご協力心より感謝申し上げます。

■後援団体

公益財団法人森村豊明会　MORIMURA HOUMEIKAI FOUNDATION
ウェルビー株式会社　Welbe, Inc.
大塚製薬株式会社　Otsuka Pharmaceutical Co., Ltd.
ヤンセンファーマ株式会社　Janssen Pharmaceutical K.K.
株式会社麻生　ASO CORPORATION
日本イーライリリー株式会社　Eli Lilly Japan K.K.
ゆう薬局グループ　U YAKKYOKU GROUP.
マツダ株式会社　Mazda Motor Corporation
アステラス製薬株式会社　Astellas Pharma Inc.
MSD株式会社　MSD K.K.
大日本住友製薬株式会社　Sumitomo Dainippon Pharma Co., Ltd.
武田薬品工業株式会社　Takeda Pharmaceutical Company Limited.
ファイザー株式会社　Pfizer Japan Inc.
吉富薬品株式会社　Yoshitomiyakuhin Corporation
リアルワールドデータ株式会社　Real World Data, Co., Ltd.
第一三共株式会社　DAIICHI SANKYO COMPANY, LIMITED
日本新薬株式会社　NIPPON SHINYAKU CO., LTD.
有限会社イトーヤク　Itoyaku Co., Ltd.
株式会社トータルケアメディック　Total Care Medic K.K.

（順不同、敬称略）

運営委員

■運営委員長　福島　弘之（医療法人　桜花会　醍醐病院）

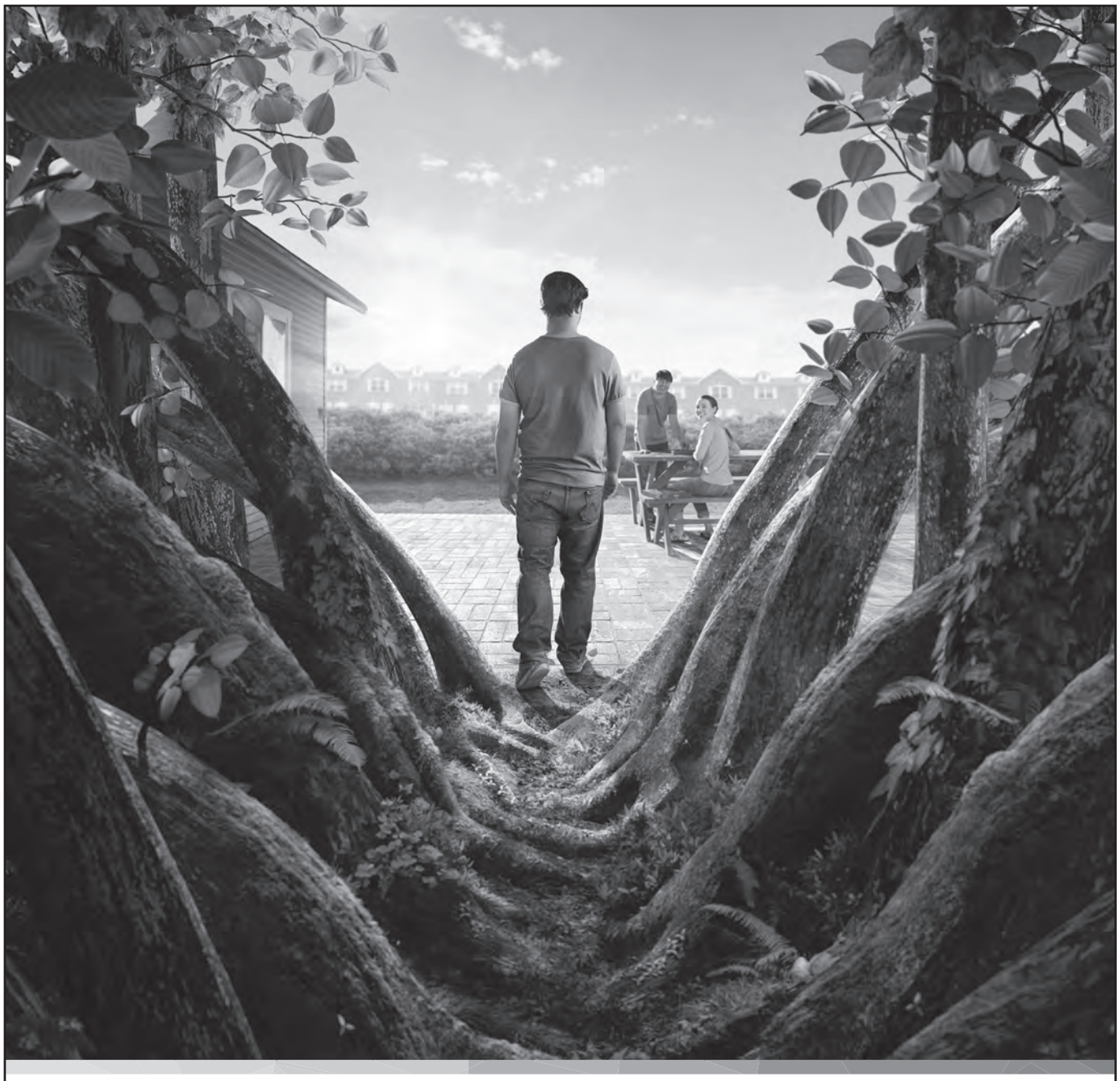
■副運営委員長　安藝　森央（公立豊岡病院組合立　豊岡病院）
伊津野　拓司（神奈川県立病院機構　神奈川県立精神医療センター）

■運営委員
〈海外担当〉
森本　佳奈（社会福祉法人京都社会事業財団　京都桂病院）
茅野　龍馬（WHO健康開発総合研究センター）
〈国内担当〉
久納　一輝（三重県立こころの医療センター）
河岸　嶺将（千葉県こども病院）
〈スモールグループワーク担当〉
吉田　和史（国立病院機構　琉球病院）
出利葉　健太（医療法人北仁会　いしばし病院）
佐竹　祐人（大阪府立病院機構　大阪急性期・総合医療センター）
濵本　妙子（三重県立こころの医療センター）
〈レセプション担当〉
中野　心介（医療法人社団新光会　不知火病院）
入來　晃久（大阪府立病院機構　大阪精神医療センター）

発行日　2019年6月22日
編集者　報告書・雑誌編集委員会：大矢　希／長　徹二／堀之内　徹／佐藤　明／濵本　妙子／出利葉　健太
CADP運営委員会：福島　弘之／安藝　森央／伊津野　拓司
制作者　株式会社メセナフィールドアークス

第18回CADP報告書における著作権と個人情報はJYPOに帰属します。

©2002-2019 CERTIFIED NON-PROFIT ORGANIZATION JAPAN YOUNG PSYCHIATRISTS ORGANIZATION（CERTIFIED NPO-JYPO）All Rights Reserved.



REXULTI®
brexpiprazole
tablets

抗精神病薬

劇薬、処方箋医薬品
注意ー医師等の処方箋により使用すること

レキサルティ®

錠1mg
錠2mg

REXULTI® tablets〈ブレクスピプラゾール錠〉

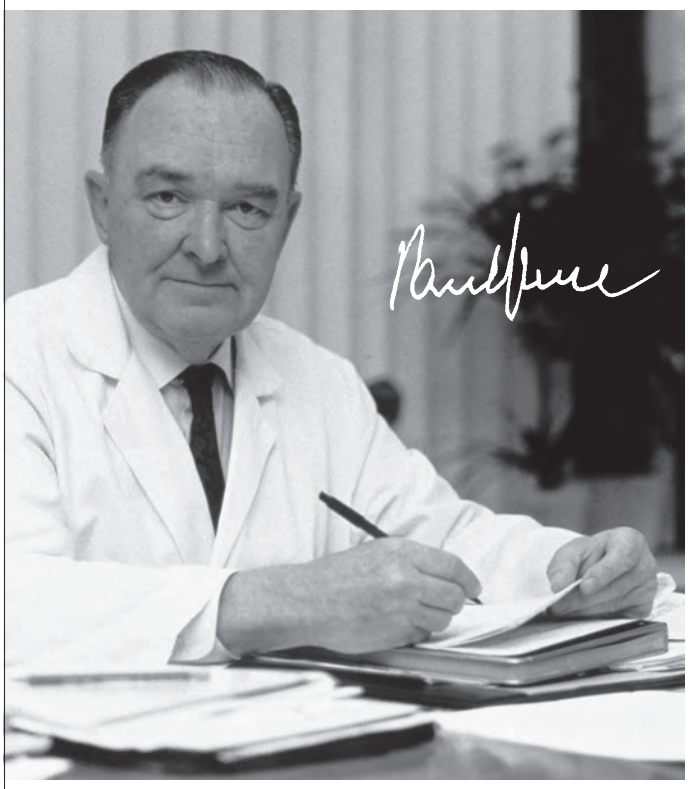
薬価基準収載

◇効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意及び用法・用量に関連する使用上の注意等は、添付文書をご参照ください。

Otsuka
製造販売元
大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田司町2-9

資料請求先
大塚製薬株式会社　医薬情報センター
〒108-8242 東京都港区港南2-16-4　品川グランドセントラルタワー

〈'19.01作成〉



ポール・ヤンセン博士（1926－2003）
基礎・臨床薬理学における数々の功績が認められ、多くの化学賞を受けている。

janssen
PHARMACEUTICAL COMPANIES OF
Johnson & Johnson

抗精神病剤　劇薬　処方箋医薬品*
インヴェガ® 錠 3mg 6mg 9mg
INVEGA® Tablets
パリペリドン徐放錠　薬価基準収載
*注意－医師等の処方箋により使用すること

持効性抗精神病剤　劇薬　処方箋医薬品*
ゼプリオン® 水懸筋注 25mg 50mg 75mg 100mg 150mg シリンジ
XEPLION® Aqueous Suspension for IM Injection
パリペリドンパルミチン酸エステル持効性懸濁注射液　薬価基準収載
*注意－医師等の処方箋により使用すること

「効能･効果」、「用法･用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等は製品添付文書をご参照ください。

製造販売元（資料請求先）
ヤンセンファーマ株式会社
〒101-0065 東京都千代田区西神田3-5-2
www.janssen.com/japan
www.janssenpro.jp（医薬品情報）
© Janssen Pharmaceutical K.K.2015-2018

2018年4月作成

私たちは常に
“3つのゆう”を心がけ、
地域の皆さまから愛される
“なじみの薬局”を目指します。

ゆう薬局の「ゆう」には、
YOU（あなたに）・優（やさしく）・友（フレンドリー）でありたい
という3つの意味が込められています。
患者さまやご家族さま、地域医療に携わる方々はもちろんのこと、
スタッフ間においてもこの思いやりの心を忘れずに、
ゆう薬局から地域社会へ優しさの輪を広げてまいります。

ゆう薬局
SINCE 1950 KYOTO

ゆう薬局グループ 93店舗
京都府内:90店舗　京都府外:3店舗

www.uno-upd.co.jp

Pfizer　大日本住友製薬

●効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

セロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害剤（SNRI）　薬価基準収載

イフェクサー®SR カプセル 37.5mg・75mg

EFFEXOR® SR CAPSULES

ベンラファキシン塩酸塩徐放性カプセル　劇薬 処方箋医薬品

注意－医師等の処方箋により使用すること

製造販売
ファイザー株式会社
〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7
資料請求先：製品情報センター

プロモーション提携
大日本住友製薬株式会社
〒541-0045 大阪市中央区道修町 2-6-8
資料請求先：くすり情報センター

EFX72F024E
P-03988

2018年4月作成

大日本住友製薬

抗精神病剤　薬価基準収載

劇薬・処方箋医薬品（注意－医師等の処方箋により使用すること）

ロナセン®錠2mg・4mg・8mg 散2%

LONASEN® ブロナンセリン製剤

●「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等につきましては添付文書をご参照ください。

製造販売元（資料請求先）
大日本住友製薬株式会社
〒541-0045 大阪市中央区道修町 2-6-8

〈製品に関するお問い合わせ先〉
くすり情報センター
TEL 0120-034-389
受付時間／月～金 9:00～17:30（祝・祭日を除く）
【医療情報サイト】https://ds-pharma.jp/

2017.3作成

Better Health, Brighter Future

タケダから、世界中の人々へ。より健やかで輝かしい明日を。

一人でも多くの人に、かけがえのない人生をより健やかに過ごしてほしい。タケダは、そんな想いのもと、1781年の創業以来、革新的な医薬品の創出を通じて社会とともに歩み続けてきました。

私たちは今、世界のさまざまな国や地域で、予防から支援活動にわたる多様な医療ニーズと向き合っています。その一つひとつに応えていくことが、私たちの新たな使命。よりよい医薬品を待ち望んでいる人々に、少しでも早くお届けする。それが、いつまでも変わらない私たちの信念。

世界中の英知を集めて、タケダはこれからも全力で、医療の未来を切り拓いていきます。

武田薬品工業株式会社
www.takeda.com/jp

Takeda

リアルワールドデータ株式会社は、全国の医療機関と連携をして、
臨床情報の可視化及び臨床研究を推進しております。

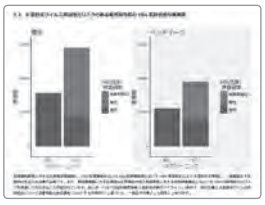
診療情報可視化

170医療機関と連携し、お預りしたデータから医療の質可視化や経営に役立つ分析レポートを無償で還元しております。

医療機関の連携状況

レポート例

専門医の見解や学会ガイドライン、診療報酬改定などに基づく有益な情報をお届けします。



検査値を用いた指標も可視化し、レポート還元可能です。

診療情報可視化の取組へのご参画医療機関を**募集**しております。

臨床研究支援

院内電子情報を用いた臨床研究実施の支援をおこなっております。

KONOTORI試験（EMR-nested RCT）

P：リチウム内服中の大うつ病／双極性障害の患者の担当医師に

I：6ヶ月毎に血液検査のお知らせをする場合と

C：しない場合と比べて

O：18ヵ月後の血中濃度は基準範囲に入りやすいか？

自動での患者スクリーニング
↓
患者適格基準の確認※　人力作業は※のみ
↓
説明および同意取得※
↓
システム内でランダム割付け
↓
6ヶ月毎に血液検査のお知らせ　／　通常診療
↓
自動でのアウトカム収集

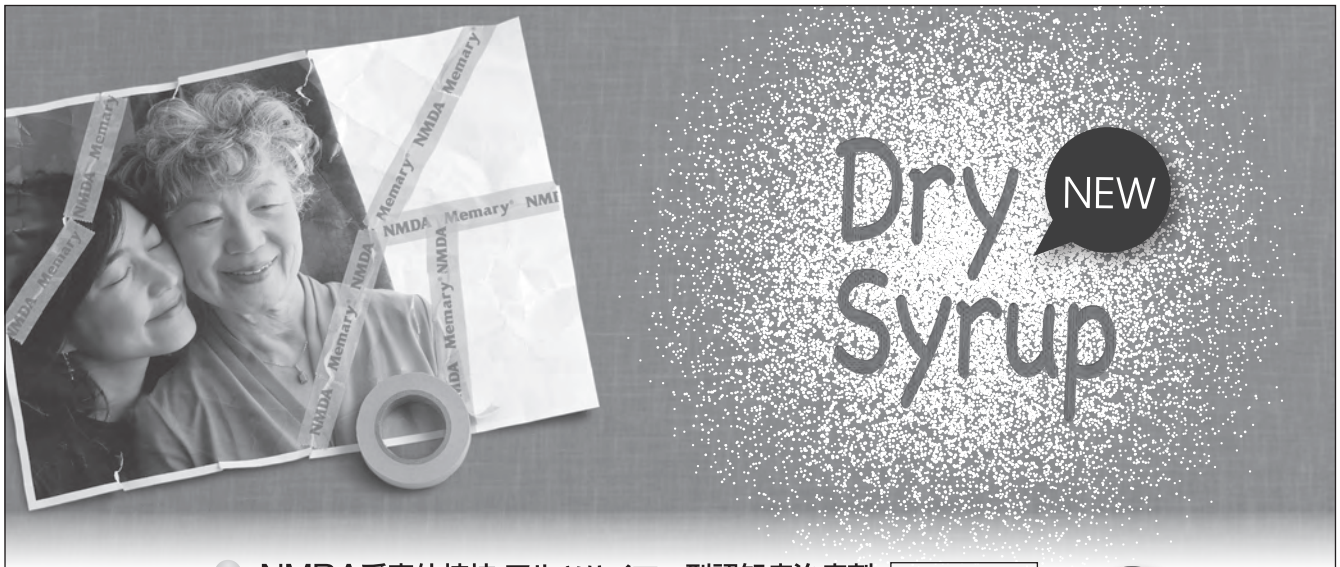
臨床現場に負担の少ない臨床研究の実施を**支援**しております。

※そのほか、院内情報一次利用の取組として、院内に設置したサーバーと電子カルテおよび院内の各種部門システムと接続し、多様な院内情報を利活用する仕組み【レジストリ構築】も開発しています。

メールもしくはお電話にてお気軽にお問合せくださいませ。ご相談、ご質問等々も受け付けております。

取組に関するお問い合せ ▶ **E-mail: info@rwdata.co.jp　Tel: 075-748-0742**

リアルワールドデータ株式会社
Real World Data, Co., Ltd.



NMDA受容体拮抗 アルツハイマー型認知症治療剤　薬価基準収載

メマリー® 錠・OD錠 5mg 10mg 20mg
ドライシロップ 2%

ドライシロップ 2% 新発売

劇薬、処方箋医薬品：注意 ー 医師等の処方箋により使用すること
一般名／メマンチン塩酸塩
※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については製品添付文書をご参照ください。

製造販売元（資料請求先）
第一三共株式会社
東京都中央区日本橋本町3-5-1

提　携
メルツ ファーマシューティカルズ

2018年6月作成

MEMO

MEMO